

琉球大学学術リポジトリ

進学期待と職業期待に関する研究(1) ー琉大附属小 と他地域との比較ー

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2010-02-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 芳澤, 毅, 島袋, 哲, 中村, 完, 島袋, 恒男, Yoshizawa, Tsuyoshi, Shimabukuro, Satoshi, Nakamura, Tamotsu, Shimabukuro, Tsuneo メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/15908

進学期待と職業期待に関する研究(1)

— 琉大附属小と他地域との比較 —

芳 澤 毅 島 袋 哲
中 村 完 島 袋 恒 男

1 はじめに

琉球大学教育学部に附属小学校が設置認可されたのは、昭和56年4月である。翌57年4月より、附属小を中心とする半径6キロメートル以内の公立小学校区域に在住する学齢児を対象として募集を行ない、初年度(57年)は、1年生と4年生の各120名(1クラス40名)を入学せしめ、その後学年進行に伴い、3ケ年で全校児童数720名、全クラス数18学級を充足させ、昭和60年3月に第1回の卒業生を送り出している。

児童の募集区域が半径6キロメートルとなると、それには7つの市町村すなわち中城村、西原町、与那原町、南風原町、浦添市、那覇市(首里地区のみ)、宜野湾市が含まれることになり、この範囲内にある既存の公立小学校数は29校にもなる。したがって、これは普通の公立小学校の学区域と比べると、比較にならないほどの広い地域にまたがっていることになる。加えて、戦後初めての国立の小学校ということで、創立当初より募集対象地域内の父母の関心は極めて高く、初年度募集時より現在に至るまで、約2.0～2.2倍の競争率を示している。そのために附属小側では、選抜方法として抽選制を採用してきた。

周知のように、附属小学校は琉球大学内の敷地内に設置されている。琉球大学そのものが、県内主要都市に隣接しているとは言え、現在なお交通の不便な所に位置している。このように立地条件の悪い小学校に、広範囲の地域から児童を通学させるということは、入学以前から子どもはもとよ

[脚注](1) 本研究の調査に当たり、県下各地区の小学校の関係者、児童及びその母親のご協力を得た。また、データの分析に当たり、大城亘武氏(沖縄キリスト教短大助教授)のご協力を得た。ここに記して感謝の意を表わしたい。

進学期待と職業期待に関する研究（芳澤・島袋・中村・島袋）

り親の側にとっても、色々な点で物心両面の相当の負担を覚悟せねばならない。しかも、競争率が高いために、応募者全員が入学できる訳でもない。

以上のようなことを考慮すると、附属小の子どもや親には、他の公立小学校と比べて、子どもの教育や将来のキャリアに関して異なるものがあると考えられる。このような観点に立って、われわれは今年（昭和60年）6月に、附属小5年の児童とその親全員を対象として、家庭における親子の日常の行動に対する態度や価値観を含めた、主として子どもの将来のキャリアに対する双方の見通しや考え方について調査した。5年生を対象として選んだ理由は、たまたま全県の同学年を対象とした調査が、昨年（昭和59年）実施されていたからである。

子どもの家庭や学校教育、それに将来に対する期待や願望について、子ども自身や親にその全体を問うということは、もちろん容易なことではない。それに今回の調査結果も、そのデータが手許に届いたばかりである。したがって今回は、附属小学校5年生の子どもと親の抱く、子どもの進学と職業に対する期待が、他の地域に比べてどのような特徴があるのか、この点についての比較分析を試みる。

Ⅱ 方 法

1. 調査対象

本研究の調査の対象者は沖縄県の全地域を代表する小学校5年生の児童621人とその母親の合計1,242人である。児童の地域別、性別の内訳は表Ⅱ-1のとおりである。児童の人数は南部と附属小が多く、八重山で少ない。

表Ⅱ-1 調査対象者の地域別、性別内訳

	北部	中部	那覇	南部	宮古	八重山	附属
人数	76 (36)	76 (35)	81 (40)	122 (54)	80 (43)	66 (38)	120 (60)

() 内は男子の数

ここで母親のデモグラフィック要因と児童の家庭的背景について若干説明しておくことにする。表Ⅱ-2は母親の年齢構成を地域別に示してある。全体的に見て最も多い年代は34才以下の33.4%であり、次いで40～44才の28.0%、35才～39才の22.6%であり、小学校5年生の母親ということから比較的若年層の母親が多いといえる。地域別では宮古、北部、中部において34才以下の母親が多い。

表Ⅱ-2 母親の年齢

	北部	中部	那覇	南部	宮古	八重山	附属
29才以下	1 (1.4)	1 (1.4)	2 (2.6)	1 (0.9)	1 (1.3)	1 (1.7)	1 (0.9)
30～34才	25 (35.2)	25 (34.2)	15 (19.5)	32 (27.8)	38 (49.4)	18 (31.0)	31 (26.5)
35～39才	16 (22.5)	16 (21.9)	19 (24.7)	20 (17.4)	17 (22.1)	13 (22.4)	32 (27.4)
40～44才	18 (25.4)	22 (30.1)	24 (31.2)	38 (33.0)	14 (18.2)	16 (27.6)	36 (30.8)
45～49才	9 (12.7)	8 (11.0)	12 (15.6)	21 (18.3)	5 (6.5)	8 (13.8)	13 (11.1)
50～54才	2 (22.8)	1 (1.4)	5 (6.5)	2 (1.7)	2 (2.6)	1 (1.7)	4 (3.4)
55～59才	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (0.9)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
60才以上	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (1.7)	0 (0.0)

()内は%

進学期待と職業期待に関する研究（芳澤・島袋・中村・島袋）

表Ⅱ-3は母親の学歴を地域別に示してある。全体的傾向としては「高校・高女」卒が38.9%と最も多く、次いで「新制中学」卒の34.4%となっている。「大学」卒は全体の6.1%と少ない。地域別に比較すると「新制中学」、「高校・高女」卒は北部、中部、南部、宮古、八重山に多く、「短大・高専」「大学」卒は那覇と附属小において多いといえる。

表Ⅱ-3 母親の学歴

	北部	中部	那覇	南部	宮古	八重山	附属
新制中学	27 (40.3)	27 (40.3)	11 (17.2)	55 (51.9)	31 (43.7)	22 (40.7)	12 (10.4)
旧制尋常	0 (0.0)	1 (1.5)	1 (1.6)	2 (1.9)	0 (0.0)	2 (3.7)	1 (0.9)
旧制高等科	2 (3.0)	2 (3.0)	3 (4.7)	2 (1.9)	1 (1.4)	1 (1.9)	2 (1.7)
高校・高女	27 (40.3)	30 (44.8)	26 (40.6)	34 (32.1)	21 (29.6)	22 (40.7)	51 (44.3)
短大・高専	8 (11.9)	6 (9.0)	11 (17.2)	8 (7.5)	14 (19.7)	3 (5.6)	27 (23.5)
大学	3 (4.5)	1 (1.5)	12 (18.8)	5 (4.7)	4 (5.6)	4 (7.4)	22 (19.1)

() 内は%

表Ⅱ-4は父親の学歴を地域別に示してある。母親とは異なり「新制中学」卒は全体的に少ない。そして地域別では母親の場合と同様の傾向を示しているが、那覇、附属小において「大学」卒がかなりの高率となっている。

表Ⅱ－４ 父親の学歴

	北部	中部	那覇	南部	宮古	八重山	附属
新制中学	14 (23.3)	21 (36.8)	8 (12.5)	44 (46.8)	22 (34.9)	10 (20.4)	14 (12.3)
旧制尋常	0 (0.0)	2 (3.5)	0 (0.0)	3 (3.2)	1 (1.6)	3 (6.1)	1 (0.9)
旧制高等科	5 (8.3)	2 (3.5)	3 (4.7)	4 (4.3)	3 (4.8)	5 (10.2)	2 (1.8)
高 校	26 (43.3)	21 (36.8)	26 (40.6)	30 (31.9)	23 (36.5)	21 (42.9)	35 (30.7)
短大・高専	6 (10.0)	2 (3.5)	3 (4.7)	2 (2.1)	3 (4.8)	6 (12.2)	12 (10.5)
大 学	9 (15.0)	9 (15.8)	24 (37.5)	11 (11.7)	11 (17.5)	4 (8.2)	50 (43.9)

() 内は%

表Ⅱ－5、表Ⅱ－6は母親の職業と父親の職業を地域別に示してある。母親の場合は全体的に見て「家事」が多く、特に附属小において多い。また、那覇において「専門職」、「一般事務」が多く、宮古では「自営A」が目立って多い。母親とは異なり父親の職業には地域差が顕著である。すなわち、那覇、附属小において「専門職」、「経営・管理」が多いことを示している。中部、南部、宮古では逆に「技能職」が多く、北部は農業や漁業であろうと思われる「その他」が顕著に多いことを示している。

父親、母親の学歴、職業を反映して家庭の収入にも地域差が見られる。家庭の収入の地域差を示した表Ⅱ－7から、那覇、附属小の家庭の収入が他地域より高いことがわかる。

表Ⅱ-5 母親の職業

	北部	中部	那覇	南部	宮古	八重山	附属
専門職	3 (4.6)	0 (0.0)	10 (14.9)	3 (2.7)	6 (8.5)	3 (5.8)	7 (6.0)
経営・管理	4 (6.2)	2 (2.9)	3 (4.5)	1 (0.9)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (1.7)
技術 A	3 (4.6)	1 (1.4)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (1.4)	0 (0.0)	1 (0.9)
“ B	3 (4.6)	4 (5.8)	3 (4.5)	2 (1.8)	4 (5.6)	2 (3.8)	13 (11.2)
一般事務	9 (13.8)	3 (4.3)	9 (13.4)	11 (9.9)	6 (8.5)	5 (9.6)	13 (11.2)
作業・労務	1 (1.5)	3 (4.3)	0 (0.0)	5 (4.5)	2 (2.8)	1 (1.9)	0 (0.0)
技能職	6 (9.2)	4 (5.8)	4 (6.0)	12 (10.8)	3 (4.2)	6 (11.5)	7 (6.0)
自営 A	11 (16.9)	8 (11.6)	3 (4.5)	17 (15.3)	13 (18.3)	7 (13.5)	6 (5.2)
“ B	0 (0.0)	2 (2.9)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (1.9)	6 (5.2)
販売	6 (9.2)	10 (14.5)	4 (6.0)	4 (3.6)	6 (8.5)	2 (3.8)	7 (6.0)
農林	2 (3.1)	0 (0.0)	0 (0.0)	3 (2.7)	0 (0.0)	2 (3.8)	0 (0.0)
家事	15 (23.1)	30 (43.5)	26 (38.8)	49 (44.1)	27 (38.0)	21 (40.4)	54 (46.6)
その他	2 (3.1)	2 (2.9)	5 (7.5)	4 (3.6)	3 (4.2)	2 (3.8)	0 (0.0)

()内は%

表Ⅱ—6 父親の職業

	北部	中部	那覇	南部	宮古	八重山	附属
専門職	6 (8.6)	1 (1.7)	13 (19.4)	4 (4.0)	9 (13.8)	4 (8.2)	23 (20.2)
経営・管理	3 (4.3)	10 (16.7)	14 (20.9)	12 (11.9)	10 (15.4)	10 (20.4)	33 (28.9)
技術 A	0 (0.0)	6 (10.0)	5 (7.5)	6 (5.9)	5 (7.7)	4 (8.2)	10 (8.8)
” B	3 (4.3)	0 (0.0)	1 (1.5)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	5 (4.4)
一般事務	8 (11.4)	3 (5.0)	9 (13.4)	5 (5.0)	6 (9.2)	5 (10.2)	10 (8.8)
作業・労務	5 (7.1)	4 (6.7)	1 (1.5)	8 (7.9)	2 (3.1)	1 (2.0)	2 (1.8)
技能職	8 (11.4)	16 (26.7)	8 (11.9)	35 (34.7)	17 (26.2)	8 (16.3)	6 (5.3)
自営 A	7 (10.0)	7 (11.7)	6 (9.0)	14 (13.9)	7 (10.8)	3 (6.1)	13 (11.4)
” B	1 (1.4)	1 (1.7)	1 (1.5)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (1.8)
販売	6 (8.6)	6 (10.0)	4 (6.0)	5 (5.0)	3 (4.6)	2 (4.1)	3 (2.6)
農林	2 (2.9)	1 (1.7)	0 (0.0)	5 (5.0)	4 (6.2)	8 (16.3)	2 (1.8)
家事	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
その他	21 (30.0)	5 (8.3)	5 (7.5)	7 (6.9)	2 (3.1)	4 (8.2)	5 (4.4)

() 内は%

表Ⅱ-7 家庭の収入

	北部	中部	那覇	南部	宮古	八重山	附属
200万以下	6 (9.5)	21 (30.4)	9 (12.3)	19 (19.2)	17 (23.6)	9 (16.7)	7 (6.3)
200万	10 (15.9)	10 (14.5)	7 (9.6)	26 (26.3)	15 (20.8)	6 (11.1)	5 (4.5)
300万	18 (28.6)	12 (17.4)	17 (23.3)	25 (25.3)	15 (20.8)	14 (25.9)	13 (11.6)
400万	10 (15.9)	12 (17.4)	10 (13.7)	13 (13.1)	7 (9.7)	9 (16.7)	24 (21.4)
500万	11 (17.5)	7 (10.1)	11 (15.1)	5 (5.1)	6 (8.3)	6 (11.1)	19 (17.0)
600万	4 (6.3)	3 (4.3)	7 (9.6)	3 (3.0)	2 (2.8)	4 (7.4)	13 (11.6)
700万	2 (3.2)	1 (1.4)	7 (9.6)	4 (4.0)	3 (4.2)	3 (5.6)	12 (10.7)
800万	2 (3.2)	2 (2.9)	0 (0.0)	2 (2.0)	2 (2.8)	1 (1.9)	8 (7.1)
900万	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (1.4)	0 (0.0)	2 (2.8)	1 (1.9)	5 (4.5)
1,000万	0 (0.0)	1 (1.4)	4 (5.5)	2 (2.0)	3 (4.2)	1 (1.9)	6 (5.4)

() 内は%

2. 調査票

本研究の資料は、昭和59年度特定研究・復帰後沖縄における教育的適応行動に関する研究（研究代表者・東江平之⁽²⁾）の小学生とその母親のデータに、新たに琉大附属小学校の児童とその母親のデータを追加し分析し直したものである。そして、全質問の中から、児童用として、A・基本的事項、B・日常生活、C・進学志望、D・職業選択、母親用として、H・進学期待、I・職業期待、L・家庭に関する事項の質問を抽出して使用した。

3. 調査の手続き

児童用調査票の記入は児童の所属教室で集団的に実施され、母親用調査票の記入は、留め置き法によって行なわれ、原則として調査票配布の翌日に回収するように努めた。

4. 調査実施期間

附属小学校の調査は、昭和60年6月に実施され、他地域の調査は昭和59年12月4日～12月26日の間に実施された。

5. データの処理

本研究では児童の日常生活、進学志望、職業選択、母親の進学期待、職業期待の各質問項目について、項目×地域の2重クロスの応答分布表を作成し、地域間の比較の分析に焦点をあてた。

III 結果と考察

第1節 琉大附属小学校の児童の日常生活の特徴

序論及び方法で述べたように琉大附属小学校の児童の父兄は、高学歴、高所得という社会経済的地位が高く、これが父兄の進学期待、職業期待を強く規定しているであろうと仮定しておいた。この仮説は、後に詳細に検

[脚注] (2) 東江平之、安谷屋良子、芳澤毅、中村完、富永大介、島袋恒男、復帰後沖縄における教育的適応行動に関する研究、昭和59年度特定研究：各質問項目の具体的内容は本報告を参照されたし。

進学期待と職業期待に関する研究（芳澤・島袋・中村・島袋）

討されることであるが、このような児童を取り巻く家庭の背景が、児童の進学期待、職業期待を規定し、児童の日常生活をも規定しているであろうことは十分に予想されることである。本節では、琉大附属小学校の児童、父兄の進学期待、職業期待の特徴について明らかにする以前の問題として琉大附属小学校の児童の日常生活を、他地域の児童の日常生活と比較しながら検討していくことにする。

まず、最初に児童の起床、就寝時間について触れておくことにする。表1-1は児童の起床、就寝時間の平均値を地域別に示したものである。全体的に児童の起床時間はAM.7:00前後となっているが、通学範囲が広く、かつ交通が不便と思われる附属小において、他地域より起床時間が早いことがわかる。就寝時間では、那覇と宮古において他地域より遅い就寝時間となっているが、この結果は後に検討するテレビ視聴時間の長さに関係しているであろう。また、勉強時間の長い附属小において就寝時間が比較的早いことがわかる。

表 1-1 起床・就寝時間の地域差

地域	北部	中部	那覇	南部	宮古	八重山	附属
起床時間	6:52	7:04	6:54	6:46	6:55	7:03	6:31
就寝時間	10:06	10:17	10:27	10:05	10:28	10:08	10:05

次に児童の日常生活の中心をなす勉強時間、遊び時間の特徴について検討していくことにする。表1-2は児童の勉強時間についての選択率を地域別に示したものである。まず最初に附属小の児童の勉強時間を全県の勉強時間の平均と比較すると、明らかに附属小の勉強時間が長いことがわかる。例えば、附属小において「3時間以上」の勉強時間を示す児童は、31.7%に達しており、その全県の平均選択率はわずか9.8%である。また、

全県で最も多く選択された勉強時間は、「30分」の23.6%である。そして附属小と地理的に隣接している那覇、中部の結果と附属小の結果を比較しても、明らかに附属小の勉強時間が長いことがわかる。そして、那覇、南部は「1時間～2時間」の選択率が高く、北部、中部、宮古、八重山では「30分～1時間」の選択率が高くなっている。

表 1 - 2 勉強時間の地域差

地域 選択肢	北 部	中 部	那 覇	南 部	宮 古	八重山	計 (平均)	附 属
0 分	0 (0.0)	9 (11.8)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (1.3)	6 (9.0)	2.7 (3.1)	0 (0.0)
15 分	8 (10.4)	4 (5.3)	2 (2.5)	6 (4.9)	9 (11.3)	13 (19.4)	7.0 (8.9)	1 (0.8)
30 分	18 (23.4)	15 (19.7)	13 (16.3)	12 (9.8)	33 (41.3)	21 (31.3)	18.7 (23.6)	7 (5.8)
1 時間	15 (19.5)	14 (18.3)	17 (21.3)	24 (19.7)	12 (15.0)	13 (19.4)	15.8 (18.9)	14 (11.7)
1.5 時間	10 (13.0)	13 (17.1)	18 (22.5)	29 (23.8)	7 (8.8)	9 (13.4)	14.3 (16.4)	19 (15.8)
2 時間	11 (14.3)	11 (14.5)	17 (21.3)	18 (14.8)	2 (2.5)	1 (1.5)	10.0 (11.5)	22 (18.3)
2.5 時間	6 (7.8)	3 (3.9)	7 (8.8)	18 (14.8)	4 (5.0)	2 (3.0)	6.6 (7.2)	19 (15.8)
3 時間～	9 (11.7)	7 (9.2)	6 (7.5)	15 (12.2)	12 (15.1)	2 (3.0)	8.5 (9.8)	38 (31.7)

数値は人数、() 内%

上に示した児童の勉強時間の地域差という特徴は性差が顕著であるといえる。図 1 - 1 と図 1 - 2 は勉強時間の地域差を男女別に示したものである。男子について検討すると附属小において「1～2時間」と「3時間以上」という2つの勉強時間に2極化しているのに対して、女子では、「2～

3時間」の選択率が高く、次いで「3時間以上」の順となり、男子より女子の勉強時間の長いことがわかる。また、那覇、南部では顕著な性差は見られないが、北部の男子は「3時間以上」の選択率が高く、逆に女子は、「1～2時間」の選択率が高くなっている。宮古、八重山では男子において「1時間以内」の選択率が圧倒的に高く、また、八重山では「3時間以上」を選択した児童はいないことがわかる。そして宮古の女子は男子と比較して勉強時間の長いことを示している。このように、附属小においては、親の進学期待、職業期待の影響を受けて、児童の勉強時間が長くなっている。しかし、他地域と比較して、高い進学期待、職業期待を持つであろうと思われる那覇において、勉強時間が短かいのは、母親の年齢が比較的若く、共働きのため子供と密接に接する機会がないということであろうか。また、地方でも一部の児童は勉強時間が長くなっており、親、児童の進学期待、職業期待が一部で高くなりつつあることを予想させている。

ここで勉強時間の中に含まれている通塾状況の特徴について触れておくことにする。図1-3は最も選択率の高かった学習塾、音楽塾、書道塾、スポーツ塾への通塾状況を地域別に示したものである。学習塾への通塾状況から検討していくと、附属小では約半数（43.3%）近くの児童が学習塾に通っていることがわかる。また、進学期待が比較的高いと思われる那覇では、予想に反し学習塾への通塾者が少ないことを示している（18.5%）。そして、進学期待の比較的低いと思われた北部（26.0%）、中部（25.0%）、宮古（22.5%）において学習塾への通塾者が多いのは、社会経済的地位が高く、かつ進学期待の高い父兄が一部に存在していることを予想させている。音楽塾への通塾も附属小は選択率が高く（35.8%）、次いで那覇（27.2%）になっている。

また、附属小は書道塾、スポーツ塾への通塾も高く、一人で複数の塾へ通塾していることを示している。中部、那覇で圧倒的に高率で選択されているのはスポーツ塾である（42.1%、29.6%）。この結果は都市地区でスポーツ塾が多いこと、そして、子供の遊び場が狭いことを反映しているかも知れない。

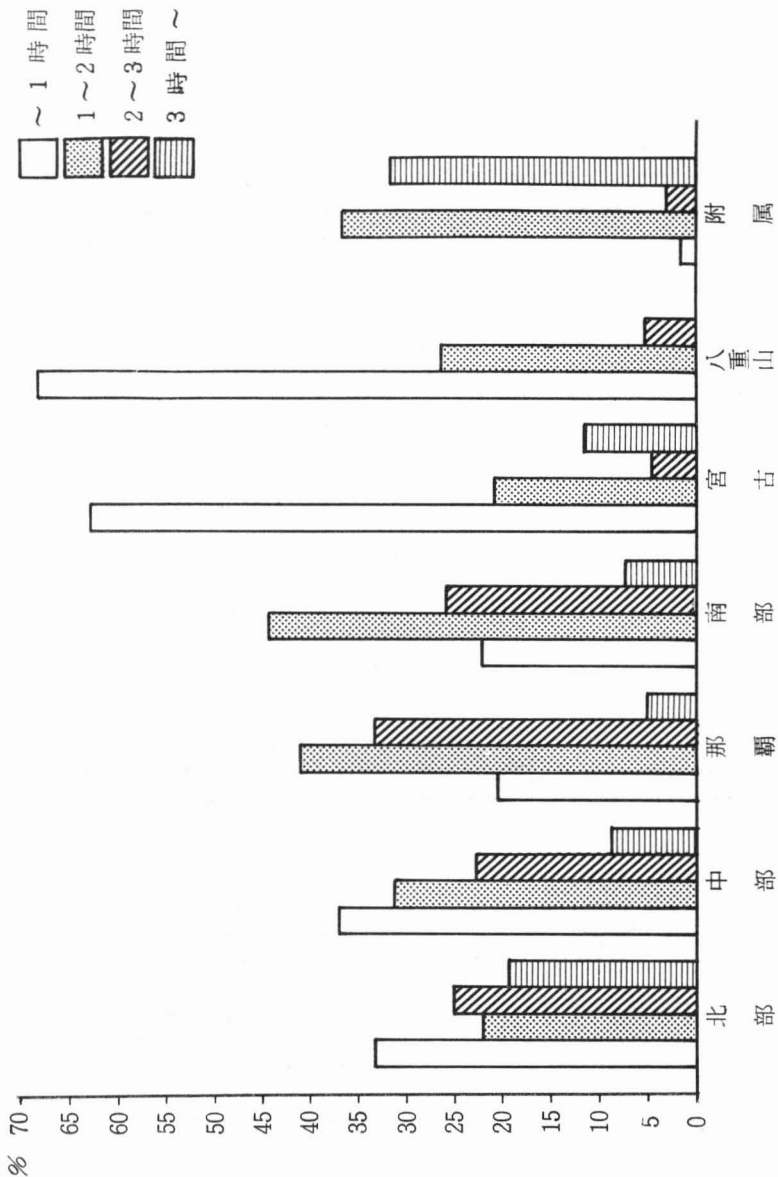


図 1—1 勉強時間の地域差 (男子)

進学期待と職業期待に関する研究（芳澤・島袋・中村・島袋）

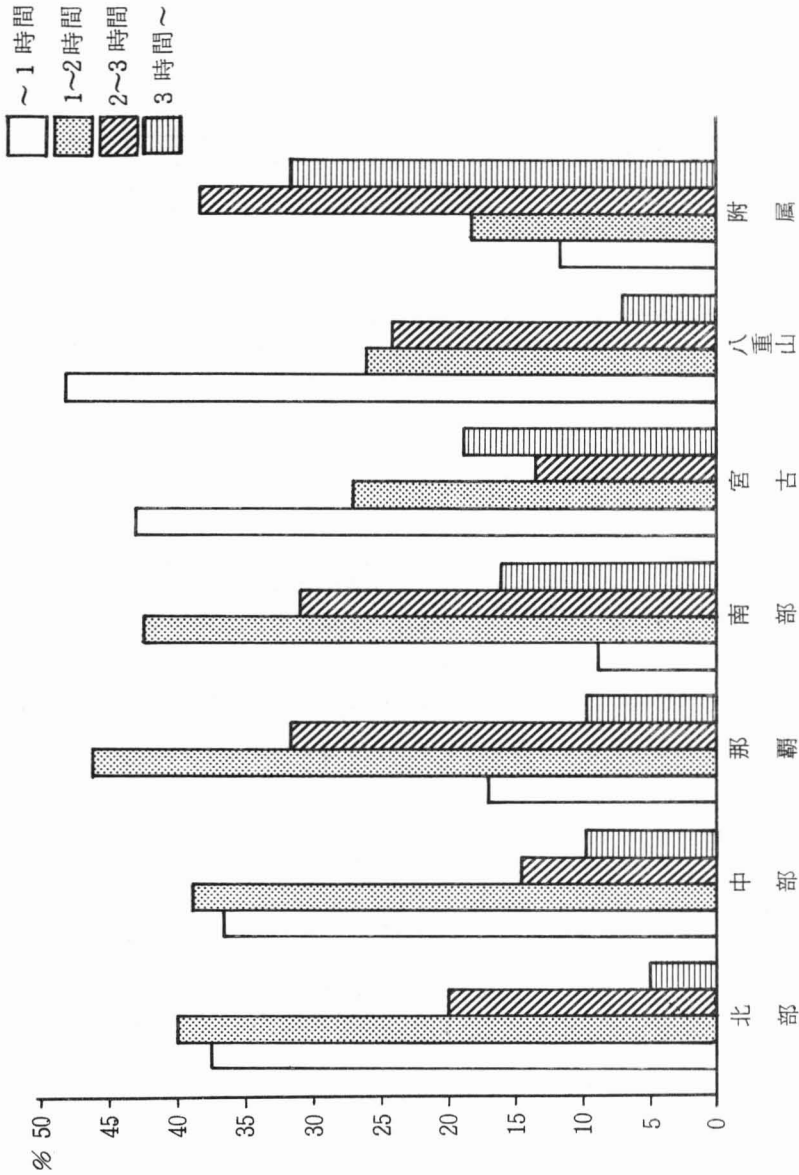


図 1—2 勉強時間の地域差 (女子)

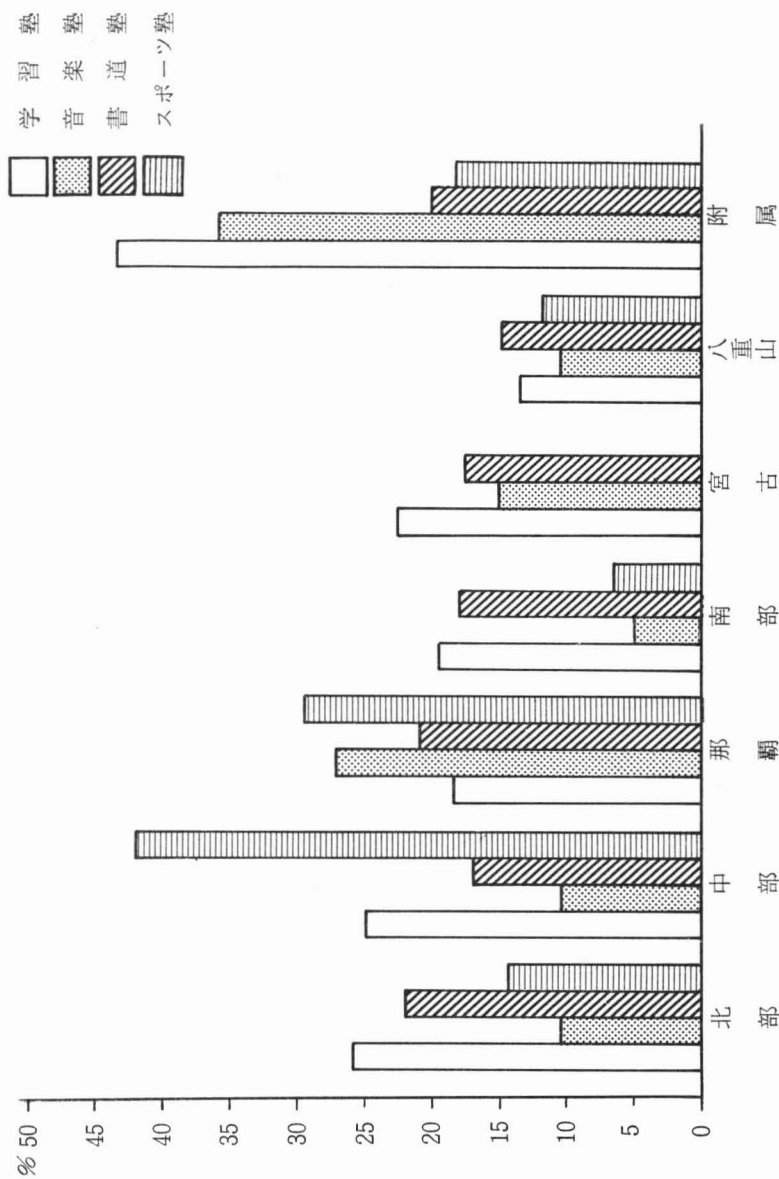


図 1-3 通塾状況の地域差

次に勉強時間とは対照的な結果を示すであろうと思われる児童の遊びの時間について検討する。表1-3は児童の遊び時間の長さの地域差を示している。全県の遊び時間の選択率の平均と附属小のそれを比較すると、「3時間以上」の遊び時間では、全県の平均が上回り（32.9% vs 20.8%）「30分～1.5時間」の選択率では附属小の方が上回ることがわかる。先に附属小では勉強時間が長いことを示したが、この結果では少なからず勉強だけに熱心でない児童も附属小に在籍することを予想させている。また、「3時間以上」の遊び時間を高率で選択しているのは、中部（42.1%）、南部（39.0%）、八重山（38.5%）である。表1-3の結果から児童の遊び時間は全体的に長時間に亘ることを示しているが、この結果は後に述べるテレビ視聴時間と関係しているものと思われる。

遊びの時間も勉強時間と同様に性差が顕著である。図1-4と図1-5は遊びの時間を男女別にして地域差を示してある。男子の結果について検討すると、中部（57.1%）、南部（52.7%）において、半数以上の児童が「3時間以上」の遊び時間を示している。また、「2～3時間」の遊び時間は、那覇（42.1%）において選択率が高くなっているが、先に示したスポーツ塾への通塾が影響しているものと思われる。男子の結果に対して女子では全体的に「1～2時間」の選択率が高く、特に附属小と北部で高率の選択となっている（40.0%、40.0%）。男子に比較して「3時間以上」の遊び時間の選択率は附属小を除く地域で激減しているのが特徴的である。このように女子の遊び時間が男子より短かいのは勉強時間が長いこと、そして、家事などの手伝い時間が長いことなどが関係しているであろう。

次に遊び時間と重複していると思われるテレビ視聴時間について検討する。表1-4はテレビ視聴時間の地域差を示してある。全県のテレビ視聴時間の選択率の平均を附属小のそれと比較してみると、「1時間」のテレビ視聴は圧倒的に附属小が高く（23.5% vs 8.2%）、また「2時間」のテレビ視聴も附属小において高いことがわかる（23.5% vs 16.4%）。この結果から親の進学期待の高いと思われる附属小の児童といえども勉強だけに専心しているのではないことがわかる。しかし、「3時間以上」のテレビ視聴は

表 1 - 3 遊び時間の地域差

地域 選択肢	地域							計 (平均)	附属
	北部	中部	那覇	南部	宮古	八重山			
0 分	3 (3.9)	2 (2.6)	1 (1.3)	1 (0.8)	3 (3.8)	4 (6.0)	2.3 (3.1)	4 (3.3)	
15 分	3 (3.9)	3 (3.9)	3 (3.8)	7 (5.7)	6 (7.5)	0 (0.0)	3.7 (4.1)	4 (3.3)	
30 分	5 (6.5)	5 (6.6)	4 (5.1)	12 (9.8)	7 (8.8)	8 (11.9)	6.8 (8.1)	14 (11.7)	
1 時間	20 (26.0)	8 (10.5)	17 (21.5)	9 (7.3)	14 (17.5)	7 (10.4)	12.5 (15.5)	23 (19.2)	
1.5 時間	7 (9.1)	8 (10.5)	3 (3.8)	20 (16.3)	9 (11.3)	8 (11.9)	9.2 (10.5)	19 (15.8)	
2 時間	12 (15.6)	13 (17.1)	16 (20.3)	18 (14.6)	14 (17.5)	12 (17.9)	14.2 (17.2)	19 (15.8)	
2.5 時間	8 (13.8)	5 (6.6)	14 (17.7)	8 (6.5)	6 (7.5)	5 (7.5)	7.7 (9.9)	12 (10.0)	
3 時間～	19 (24.7)	32 (42.1)	21 (26.6)	48 (39.0)	21 (26.4)	23 (38.5)	27.3 (32.9)	25 (20.8)	

数値は人数、() 内%

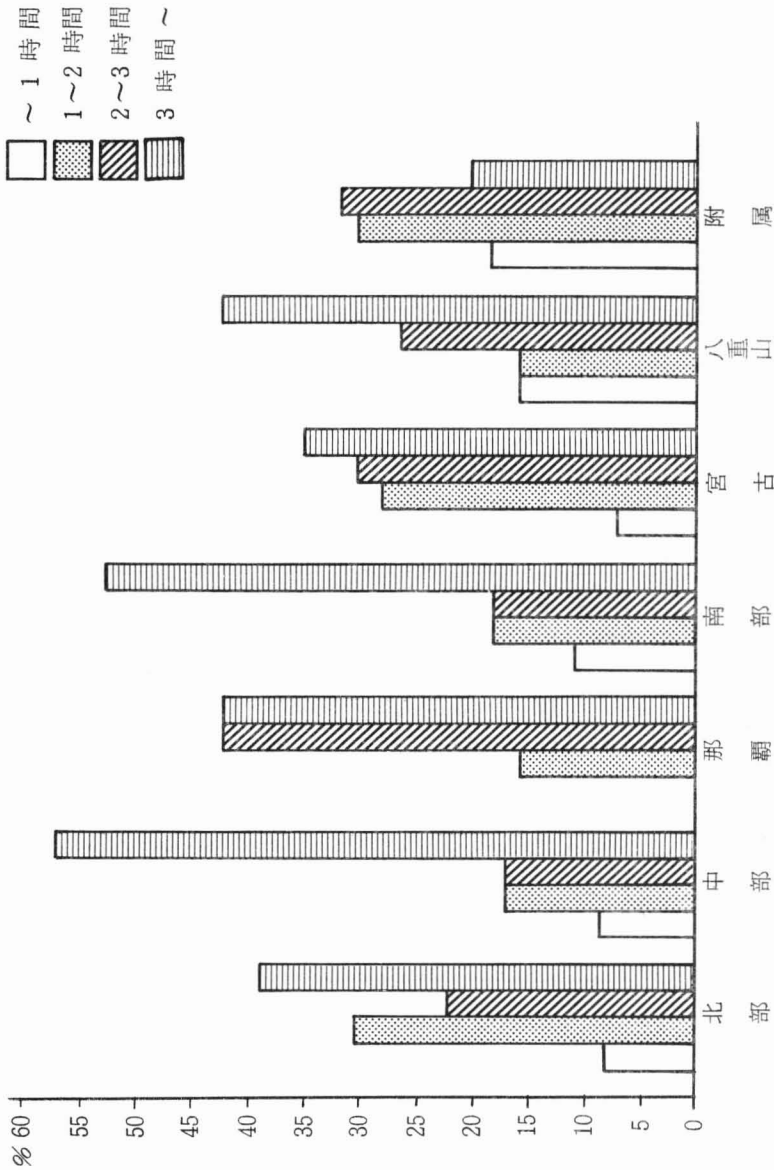


図1-4 遊び時間の地域差 (男子)

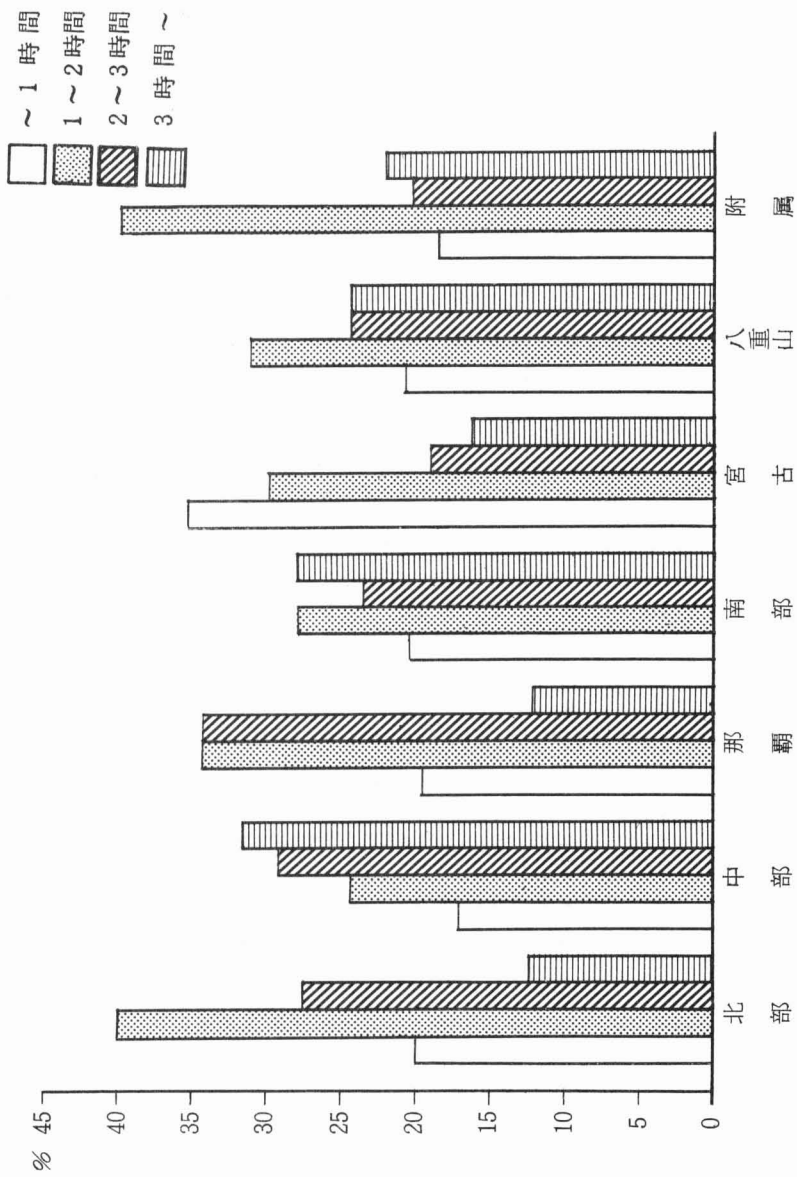


図1-5 遊び時間の地域差(女子)

表 1-4 テレビ視聴時間の地域差

地域 選択肢	北部	中部	那覇	南部	宮古	八重山	計 (平均)	附属
0 分	1 (1.3)	0 (0.0)	3 (3.8)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (1.5)	0.8 (1.1)	6 (5.0)
15 分	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (1.3)	0 (0.0)	0.2 (0.2)	1 (0.8)
30 分	3 (3.9)	2 (2.6)	1 (1.3)	2 (1.6)	1 (1.3)	6 (9.0)	2.5 (3.3)	8 (6.7)
1 時間	7 (9.1)	2 (2.6)	8 (10.3)	8 (6.5)	6 (7.5)	9 (13.4)	6.7 (8.2)	28 (23.5)
1.5 時間	10 (13.0)	5 (6.6)	17 (21.8)	17 (5.7)	6 (7.5)	9 (13.4)	9 (11.3)	13 (10.9)
2 時間	20 (26.0)	8 (10.5)	11 (14.1)	20 (16.3)	7 (8.8)	15 (22.4)	13.5 (16.4)	28 (23.5)
2.5 時間	10 (13.0)	6 (7.9)	17 (21.8)	18 (14.6)	4 (5.0)	9 (13.4)	10.7 (12.6)	12 (10.1)
3 時間～	26 (33.8)	53 (69.7)	21 (26.9)	68 (55.3)	55 (68.8)	18 (26.9)	40.2 (46.9)	23 (19.2)

数値は人数、() 内%

附属小が19.2%であるのに対し、中部が69.7%、宮古が68.8%とかなり高い選択率を示している。

先に女子よりも男子において遊びの時間が長いことを示したが、テレビ視聴時間に性差はどのような特徴を示すであろうか。図1-6と図1-7はテレビ視聴時間の地域差を男女別に示したものである。全体的にわずかながら短時間のテレビ視聴時間を女子が選択する傾向にあるが、それほど顕著ではなく、中部(77.1%)、宮古(72.1%)、南部(58.2%)において男女とも「3時間以上」のテレビ視聴時間を高率で選択している。性差が顕著な地域は那覇である。すなわち、那覇の児童のテレビ視聴時間は男子で「3時間以上」の選択率が高く(50.0%)、女子はわずかの選択率を示している(5.0%)。しかし、「2~3時間」のテレビ視聴率は女子において高いことがわかる(45.0%)。遊び時間と同様にテレビ視聴時間においても女子が短いのは、男子より女子の勉強時間が長いこと、そして家事の手伝いなどが関係しているものと思われる。

最後に女子の日常生活に大きな影響を与えていると思われる手伝い時間について検討する。表1-5は手伝い時間の地域差を示したものである。各地の平均の手伝い時間と、附属小のそれを比較すると、手伝い時間「30分」において差が見られている(32.4% vs 46.7%)。つまり、附属小において「30分」の手伝い時間を選択している児童が多いことがわかる。その他の手伝い時間では両者に顕著な差異は見られないが、「1.5時間以上」、「2.5時間以上」の手伝いは附属小の選択率が低くなっている。全体的に「15分~1時間」の手伝い時間の選択率が高く、小学校5年生としては妥当な時間かも知れない。

先に述べたように、手伝いの時間には性差が顕著であると思われる。手伝い時間の地域差を男女別に示した図1-8、図1-9の結果から、男子は附属小においても県下の各地域においても「1時間以内」の手伝い時間を選択していることがわかる。しかし、女子では八重山、附属小において「1時間以内」の手伝い時間を選択しているが、他地域では、それほど選択率は高くない。女子で顕著な手伝い時間は「1~2時間」であり、北部

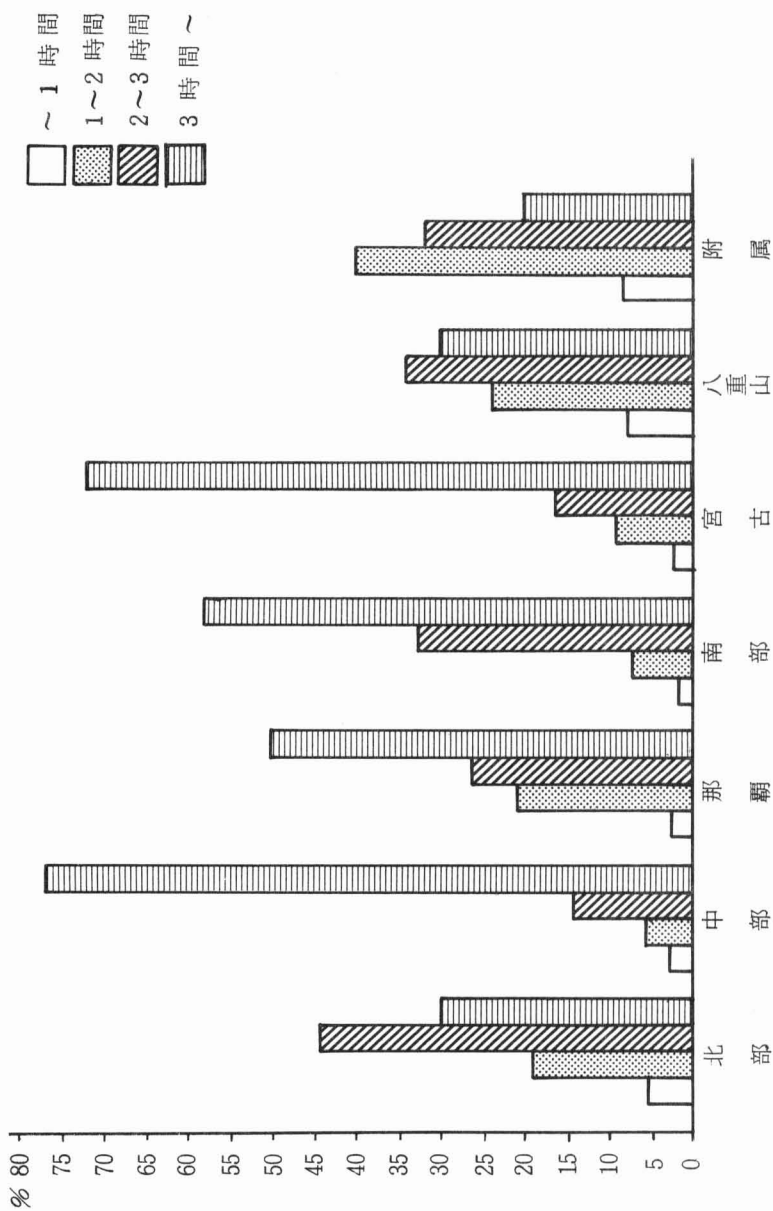


図1-6 テレビ視聴時間の地域差（男子）

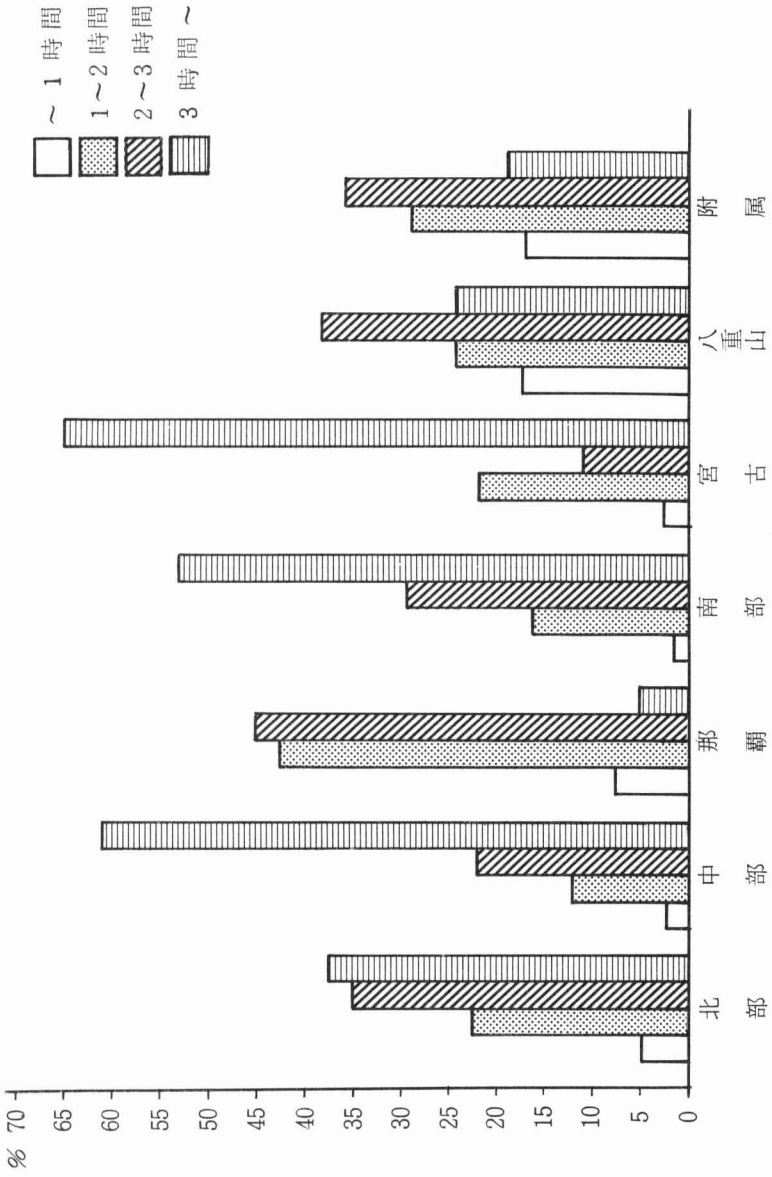


図 1-7 テレビ視聴時間の地域差 (女子)

進学期待と職業期待に関する研究（芳澤・島袋・中村・島袋）

中部において高い選択率を示している。このように男子で手伝い時間が短かいのは遊びの時間が長いことになるが、附属小の場合はその分勉強時間に費やしていることになろう。女子では附属小を除く本島においてよく手伝うことがわかる。

以上に検討してきたように、附属小の児童と他地域の児童の日常生活の送り方には明らかに差異が見られる。おそらく、このような差異は、親の進学期待、職業期待に大きく左右されているであろう。しかし、先に示した結果の一部から、親の進学期待、職業期待がそのままストレートに子供の進学、職業に関する意識を決定するわけではないことがわかる。そこには、親子の相互作用のあり方、子供の内面世界の特徴などの要因があるものと思われる。次回の報告において、進学期待、職業期待に関して、しつけの要点、子供の価値観の側面からの検討をしたいものである。

表 1—5 手伝い時間の地域差

地域 選択肢	北部	中部	那覇	南部	宮古	八重山	計 (平均)	附属
0 分	7 (9.1)	7 (9.2)	4 (5.1)	5 (4.1)	8 (10.0)	9 (13.4)	6.7 (8.5)	5 (11.1)
15 分	12 (15.6)	15 (19.7)	13 (16.7)	22 (17.9)	27 (33.8)	22 (32.8)	18.5 (22.8)	25 (20.8)
30 分	25 (32.5)	25 (32.9)	27 (34.6)	46 (37.4)	17 (21.3)	24 (35.8)	27.3 (32.4)	56 (46.7)
1 時間	22 (28.6)	16 (21.1)	18 (23.1)	25 (20.3)	10 (12.5)	8 (11.9)	16.5 (19.6)	22 (18.3)
1.5 時間	5 (6.5)	6 (7.9)	10 (12.8)	9 (7.3)	9 (11.3)	0 (0.0)	6.5 (7.6)	5 (4.2)
2 時間	2 (2.6)	1 (1.3)	2 (2.6)	7 (5.7)	5 (6.3)	2 (3.0)	3.2 (3.6)	4 (3.3)
2.5時間～	4 (5.2)	6 (7.9)	4 (5.1)	9 (7.3)	6 (7.5)	2 (3.0)	5.2 (6.0)	1 (0.8)

数値は人数、() 内%

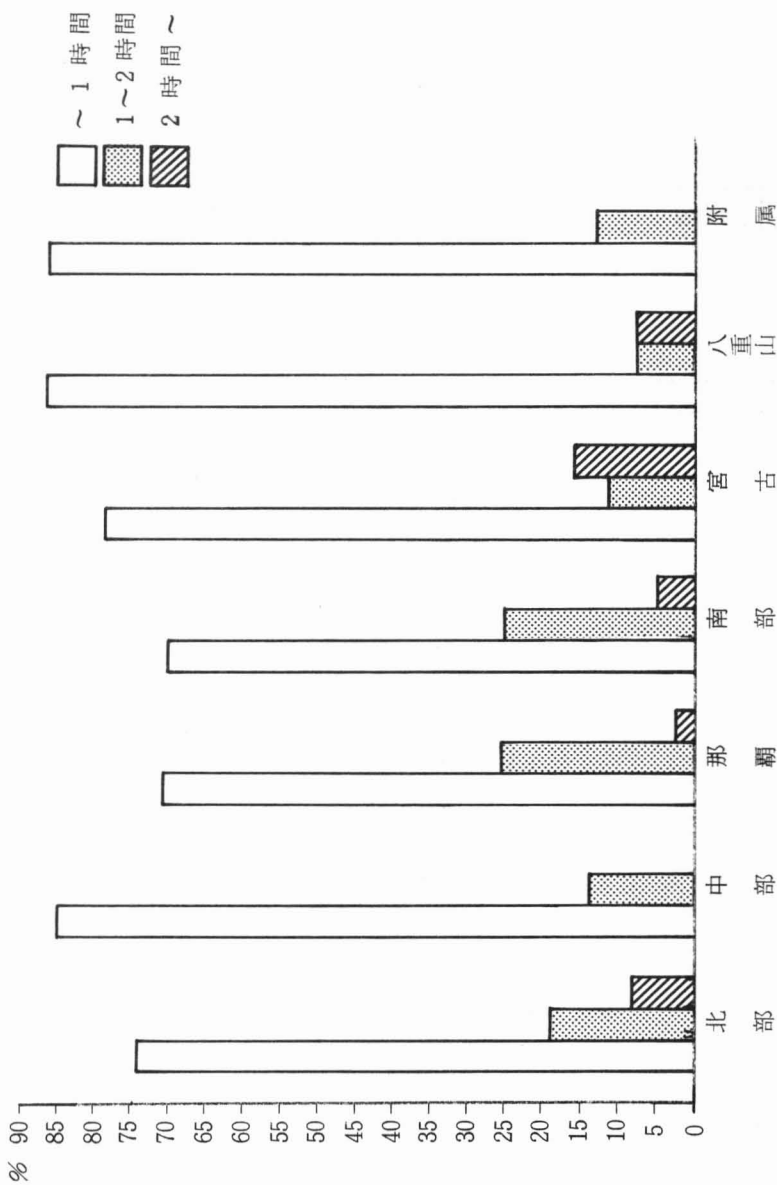


图 1—8 手伝い時間の地域差 (男子)

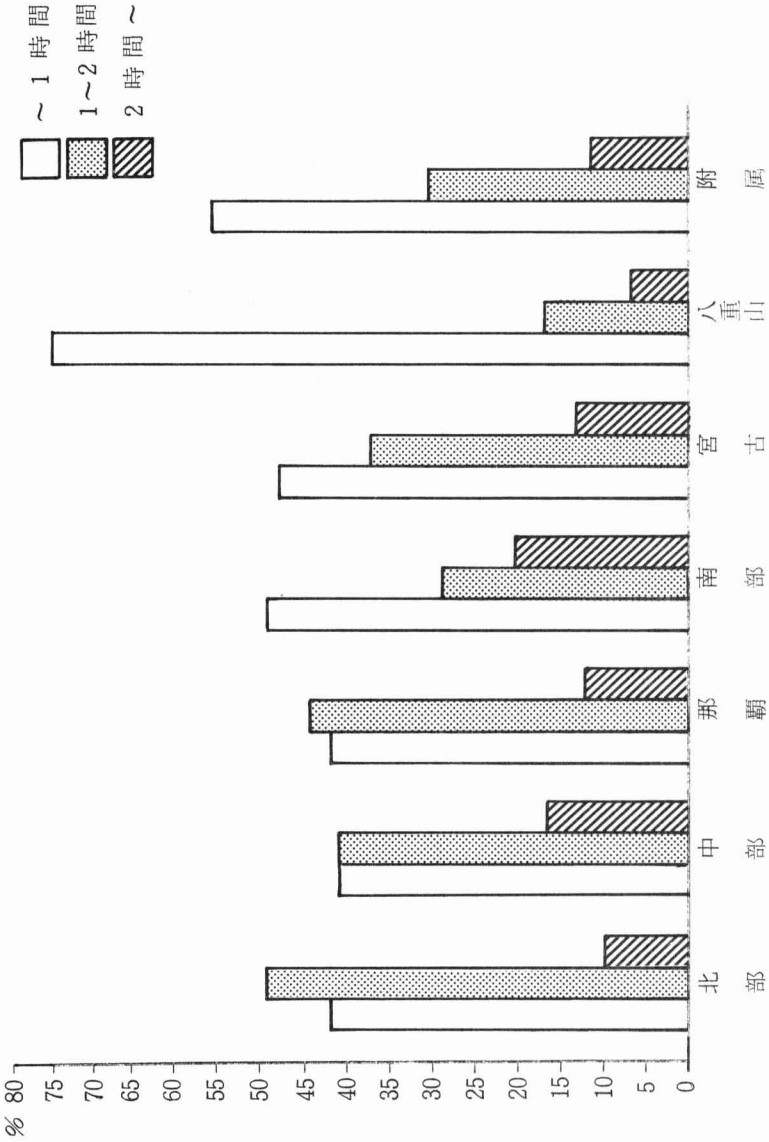


図 1-9 手伝い時間の地域差（女子）

第2節 琉大附属小学校の進学期待

前節で触れたように、附属小学校の親の社会経済的地位は、他地域の親に比べて高い。加えて、現状ではきわめて交通の便の悪い所に位置しながらも、他の公立学校に比べると、附属小学校の学区は広範囲にまたがっている。しかも子どもたちは、入学時に高い競争率のゆえに抽選によって選抜されている。

このようなことを考え合わせると、附属小学校の親と子どもには、他の公立小学校のそれらに比べると、学校教育を始めとして、多くの点で異なる態度や考え方が認められるに違いない。本節でとりあげる親と子の抱く進学期待についても、いくつかの特徴的な事柄が指摘できると思われる。

以上のような観点にたって、本節においては、1) 子どもが自己自身の将来に関して、どの程度の学校への進学を希望しているのか、2) 子どもに対する親の進学期待はどうか、3) 県外進学の希望はどうなっているのか、4) 上級学校への進学理由の特徴は何なのか、この4点について附属小学校の特徴を明らかにしていきたい。

1. 子どもの進学期待

進学期待に関する本調査の設問は「あなたは、将来どのくらいの学校まで行きたいと思いますか」である。選択肢としては、①中学校、②高校、③高等専門学校、④短大、⑤大学、⑥大学院、⑦その他、の7つを設け、被調査者に、この中の1つのみを選択して貰った。選択数と百分比を附属と対比させて、地域別（地域全体の平均としての「全県」も含めて）に一覧表にしたのが表2-1である。附属の全回答者数120名中、中学を選んだ者が1.7%、高校8.3%、高専5.0%、短大9.2%、大学55.0%、大学院20.8%である。（「その他」を選んだ者は、附属を含めて他の地域においても皆無であった。）

これらの数値を全県と比べると、附属の子どもたちの期待値は、かなり高いと言えるだろう。このことは、高校の選択比（全県＝33.0%、附属＝8.3%）と、大学や大学院の選択比（全県は48.1%と4.6%、附属は55.0%

進学期待と職業期待に関する研究（芳澤・島袋・中村・島袋）

と20.8%）を見れば明らかである。

この傾向は、県内各地域と比べても概ね指摘できるが、大学に関しては那覇（78.2%）や宮古（61.3%）の方が、附属よりも高くなっている。しかし、大学院に関しては、附属の方がかなり高い。

表2-1を簡略化して、「高校まで」、「短大」レベル、「大学以上」にまとめたのが表2-2である。「高校まで」というのは、表2-1における中学と高校を加算したものである。以下同様に「短大」は高専と短大、「大学以上」は大学と大学院の合計でまとめている。

表 2-1 子どもの進学期待

	北部	中部	那覇	南部	宮古	八重山	全県	附属
中 学	— ()	1 (1.4)	—	—	2 (2.5)	2 (3.3)	5 (1.0)	2 (1.7)
高 校	23 (31.1)	30 (41.1)	6 (7.7)	61 (52.7)	19 (23.8)	20 (32.9)	159 (33.0)	10 (8.3)
高 専	3 (4.1)	2 (2.7)	1 (1.3)	5 (4.3)	—	7 (11.5)	18 (3.7)	6 (5.0)
短 大	11 (14.9)	8 (11.0)	5 (6.4)	12 (10.3)	5 (6.3)	5 (8.2)	46 (9.5)	11 (9.2)
大 学	35 (47.3)	29 (39.7)	61 (78.2)	33 (28.4)	49 (61.3)	25 (41.0)	232 (48.1)	66 (55.0)
大 学 院	2 (2.7)	3 (4.1)	5 (6.4)	5 (4.3)	5 (6.3)	2 (3.3)	22 (4.6)	25 (20.8)
計	74 (100.1)	73 (100.0)	78 (100.0)	116 (100.0)	80 (100.2)	61 (100.2)	482 (99.9)	120 (100.0)

() 内は%

表 2 - 2 子どもの進学期待

	北部	中部	那覇	南部	宮古	八重山	全県	附属
高校まで	23 (31.1)	31 (42.5)	6 (7.7)	61 (52.6)	21 (26.3)	22 (36.1)	164 (34.0)	12 (10.0)
短大	14 (18.9)	10 (13.7)	6 (7.7)	17 (14.7)	5 (6.3)	12 (19.7)	64 (13.3)	17 (14.2)
大学以上	37 (50.0)	32 (43.8)	66 (84.6)	38 (32.8)	54 (67.5)	27 (44.3)	254 (52.7)	91 (75.8)
計	74 (100.0)	73 (100.0)	78 (100.0)	116 (100.1)	80 (100.1)	61 (100.1)	482 (100.0)	120 (100.0)

() 内は%

表 2 - 2 でみると、附属の「大学以上」(75.8%) は、那覇(86.4%) に次いで第 2 位となる。その差(84.6-75.8=8.8) は 9%弱である。しかし、さらに短大と大学以上をひとまとめにすると(那覇=92.3%、附属 90.0%) その差は、2.3%に縮まる。短大以上への進学希望者は、那覇の方が僅かに優っているが、表 2 - 1 の大学院進学希望者が附属にかなり多いということを見ると、この両者における期待値には優劣がつけ難いということが言えるだろう。

2. 親の進学期待

子どもに対する親の進学期待を問う設問は、「あなたのお子さんは、将来どのくらいの学校まで行かせたいですか」であり、選択肢は前述の子どもに対する場合と全く同じである。

表 2 - 3 が、選択数とその百分比である。附属の百分比は、中学 0.8%、高専 0.8%、短大 5.9%、大学 66.9%、大学院 25.4% である。これを全県と比較すると、大学と大学院において、附属の方がかなり高くなっていることが分る。

表 2-3 親の進学期待

	北部	中部	那覇	南部	宮古	八重山	全県	附属
中 学	—	—	—	—	—	—	—	1 (0.8)
高 校	13 (18.0)	14 (20.0)	3 (3.9)	21 (18.9)	15 (18.8)	16 (27.1)	82 (17.4)	—
高 専	3 (4.2)	3 (4.3)	2 (2.6)	12 (10.8)	3 (3.8)	3 (5.1)	26 (5.5)	1 (0.8)
短 大	10 (13.9)	11 (15.7)	5 (6.4)	15 (13.5)	9 (11.3)	3 (5.1)	53 (11.3)	7 (5.9)
大 学	41 (56.9)	40 (57.1)	62 (79.5)	59 (53.2)	45 (56.3)	35 (59.3)	282 (60.0)	79 (66.9)
大 学 院	2 (2.8)	1 (1.4)	6 (7.7)	2 (1.8)	8 (10.0)	1 (1.7)	20 (4.3)	30 (25.4)
そ の 他	3 (4.2)	1 (1.4)	—	2 (1.8)	—	1 (1.7)	7 (1.5)	—
計	72 (100.0)	70 (99.9)	78 (100.0)	111 (100.0)	80 (100.2)	59 (100.0)	470 (100.0)	118 (99.8)

() 内は%

しかし、大学における期待値を那覇（79.5%）と比べると、やはりここでも、子ども同様に附属（66.9%）の方が低くなっている。

ところが、表2-3を簡略化した表2-4（ここでは表2-3における「その他」が除外されている）の「大学以上」をみると、附属の期待値（92.3%）は、那覇のそれ（87.2%）をかなり上回ることが分る。これは、子ども同様に、大学院への期待値が、附属の親の場合にも相当高くなっている（25.4%）ことによるものである。また、短大を含めた高等教育への

期待値を合計してみても、附属の方（97.0％）が、僅かに那覇（96.2％）を上回っていることが分かる。

表 2 - 4 親の進学期待

	北部	中部	那覇	南部	宮古	八重山	全県	附属
高校まで	13 (18.0)	14 (20.0)	3 (3.9)	21 (18.9)	15 (18.8)	16 (27.1)	82 (17.4)	1 (0.8)
短大	13 (18.0)	14 (20.0)	7 (9.0)	27 (24.3)	12 (15.1)	6 (10.2)	79 (16.8)	8 (6.7)
大学以上	43 (59.7)	41 (58.5)	68 (87.2)	61 (55.0)	53 (66.3)	36 (61.0)	302 (64.3)	109 (92.3)
計	69 (95.7)	69 (98.5)	78 (100.1)	109 (98.2)	80 (100.2)	58 (98.3)	463 (98.5)	118 (99.8)

() 内は%

以上みてきたように、附属の親と子どもに共通して言えることは、短大以上の高等教育への期待値が高いということ、とりわけ大学院への進学希望者が、他のすべての地域に比べて高くなっているということである。

3. 性別による進学期待

次に、以上の子どもと親の進学期待を調査対象となった子どもの性別でみてみよう。これを、「高校まで」、「短大」、「大学以上」の3つのレベルで地域別に示したのが、図2の1、2、3の棒グラフである。

この3つのレベルで附属に特徴的なことは、どの学校水準においても（期待値の高低に関わらず）、顕著な性差が見られないということであろう。とくに「大学以上」のレベルで、このこと（男=76.7%、女=75.0%）が指摘できる。しかし同様なことが、那覇の場合にも言える。すなわち、進学期待値の高い那覇や附属の場合には、「大学以上」の選択比に性差がなく、

しかも、より多くの者がそれを希望しているということを示している（このことは、宮古の場合にも、その傾向を見てとれる）。

次に、子どもの性別による親の進学期待の差異をみてみよう。図2の4、5、6がそれである。

全体的にみて、親の期待が子ども自身のそれと異なる点は、進学期待が女子よりも男子において高くなっているということである。このことは、「大学以上」のレベルを見れば明らかであろう（しかし、八重山のみは例外で女子の方が男子よりかなり高くなっている）。

この傾向を最も顕著に示しているのが、附属の親である。すなわち、附属の場合には、百パーセントの親が、男子に対しては「大学以上」の進学期待をもっているのである。

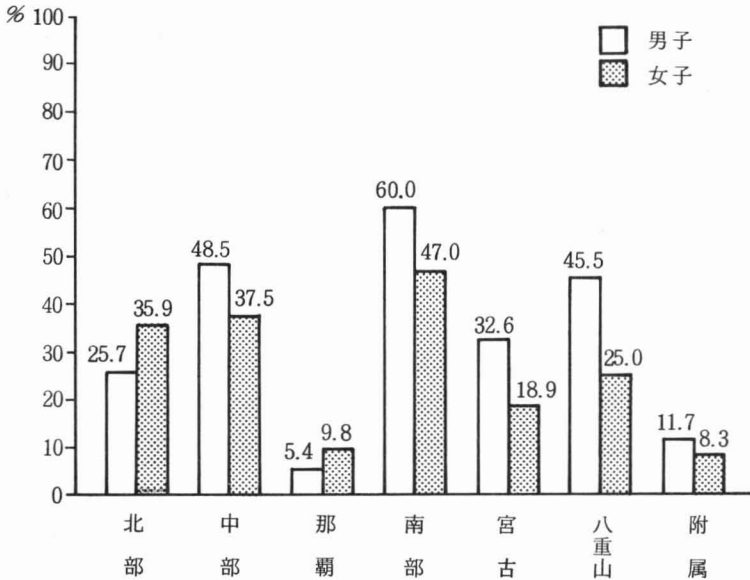


図2-1 子どもの進学期待（性別）－「高校まで」

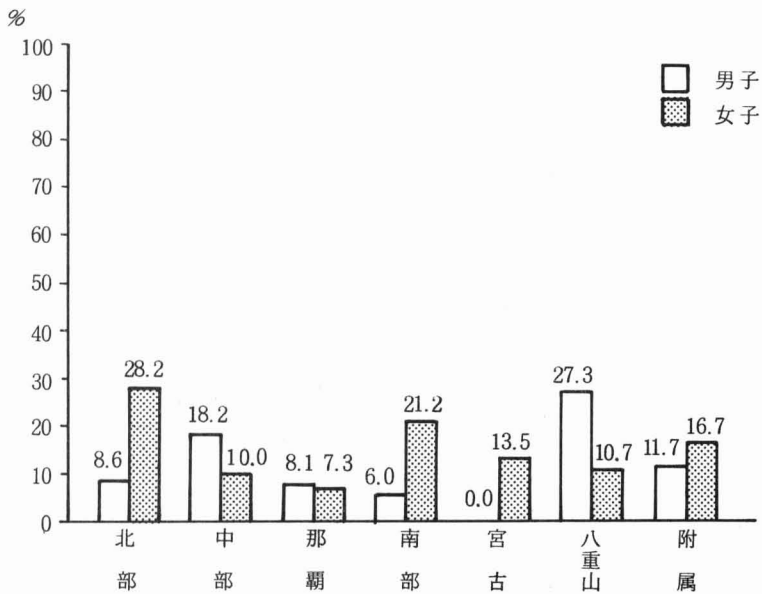


図 2-2 子どもの進学期待 (性別) - 「短大」

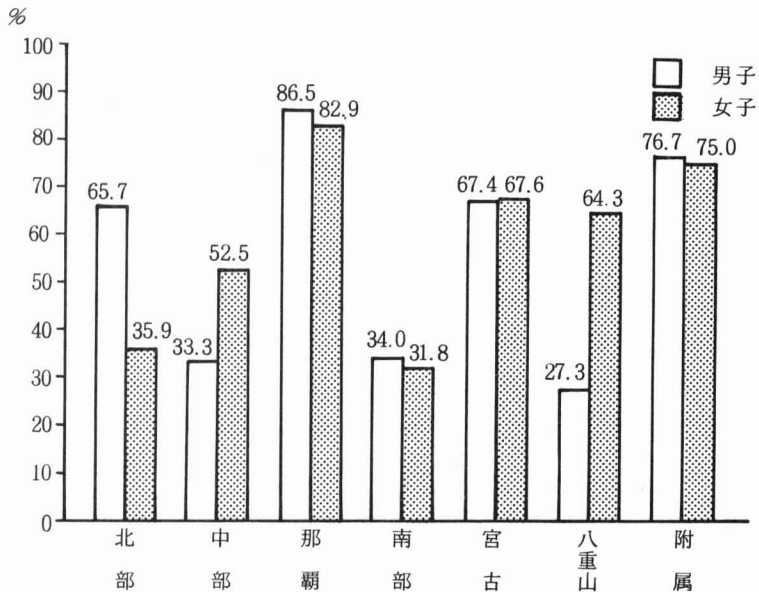


図 2-3 子どもの進学期待 (性別) - 「大学以上」

進学期待と職業期待に関する研究（芳澤・島袋・中村・島袋）

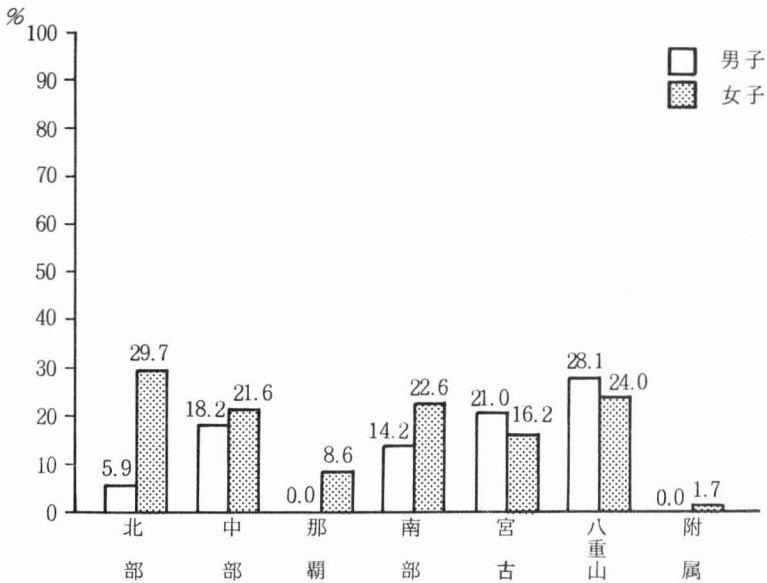


図 2-4 親の進学期待（性別）—「高校まで」

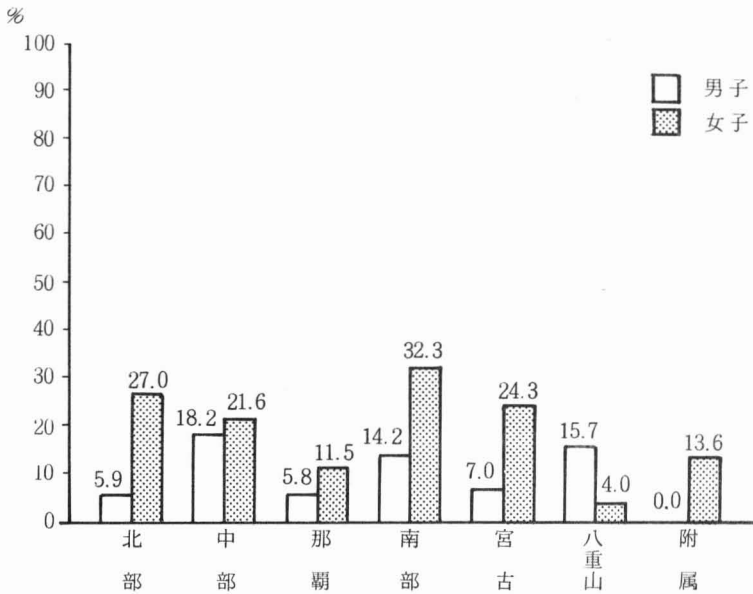


図 2-5 親の進学期待（性別）—「短大」

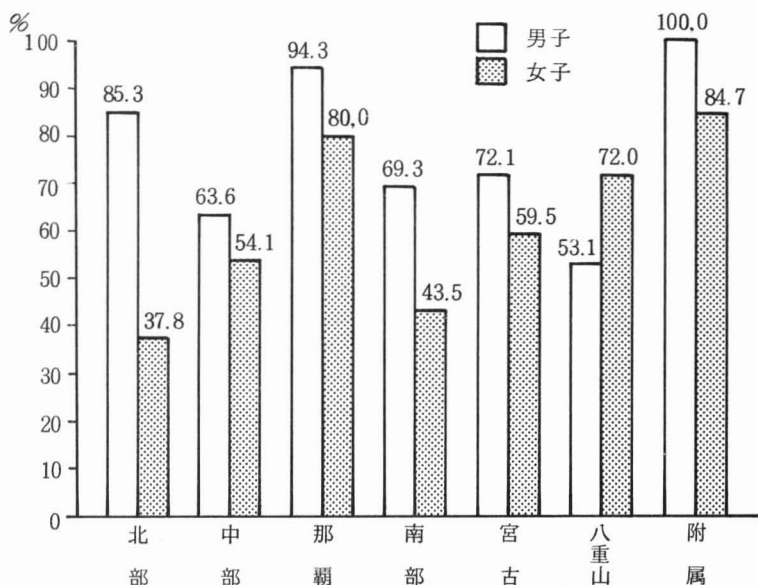


図2—6 親の進学期待（性別）—「大学以上」

対照的に図2全体を見ると、一般的には「高校まで」と「短大」という学校水準の低い方における親の選択比が、女子の方が高くなっているということであろう（勿論、例外もある。「高校まで」における宮古と八重山、そして「短大」の八重山がそれである）。

4. 県外進学

ここでいう「県外進学」とは、上級学校へ進学を希望する際に、県外の学校を選択するということである。日本本土と遠く隔たった本県において、県外の上級学校へ進学するという事は、親の側に立ってみれば、かなりの経済的負担を強いられることは明らかである。加えて、戦前の本県においては、旧制の中等学校や高等女学校師範学校が最高の学府であり、それ以上の高等教育機関は存在しなかった。また、戦後に至っても、長期に亘る異民族支配の下、日本本土に渡るといのは、きわめて困難なことであった。

このようなことを考慮すると、上級学校への進学に際して、県内の高等

教育機関よりも県外（とくに東京を中心とする主要都市）のそれを希望するということとは、本県の親と子どもの双方にとって、ある意味では、進学期待の高さを物語っているとも言えよう。というのも、歴史の浅い県内の大学よりは、歴史がより古くて、全国的に知られた有名大学に子どもが進学するということは、沖縄の子どもにとっては勿論、親にとっても一種の憧れであると言えるだろうからである。

県外進学を問う子どもに対する設問は、「進学のために県外の学校へ行きたいと思いますか」であり、親に対するそれは「あなたのお子さんを進学させるのに、県外の学校へ行かせたいと思いますか」である。そして、選択肢には、前述の7つを用意し、「行きたい（行かせたい）」学校水準を、すべて選択して貰った。したがって、以下図2の7から12までの百分比に基づく比較図を提示するが、これらの選択比の合計は100%ではない。というのも、地域による県外進学希望のバラツキがきわめて激しい上に、2つ以上の選択肢を選択する者の偏りも存在するからである。（ここでも「その他」は省かれている。）

図2-7で分かるように、一般的には、いずれの学校水準においても、県外進学を希望する子どもたちは、県内でも僻遠地域に位置する離島（八重山、宮古）や北部、それに那覇に多いと言える。附属の子どもたちは、中学まで15.0%、高校20.8%、短大15.8%、大学以上58.3%で、これは殆んど那覇地区と対応している。

同様の傾向は、図2-8の親の場合にも見られるとも言えよう。（もっとも、ここでは宮古の親のみが、飛び抜けた県外志向を示してはいるが。）附属の親と那覇のそれを比べて若干異なる点は、那覇は短大における県外志向が強く、附属では県外高校への進学希望者が多いということであろう。これは、前掲の表2の3、4で分るように、附属の親の短大レベルへの進学期待が、那覇に比べると少なくなっているということに、その一因が求められるのかも知れない。いずれにしても、附属の親と子は、上級学校への進学期待にしても、上級学校の県外志向の点においても、都市である那覇地区に近似しているとも言えよう。

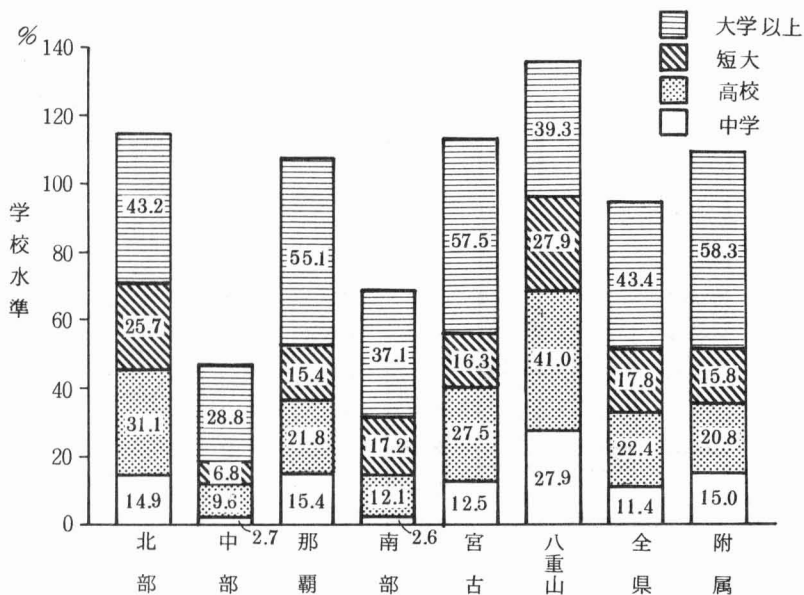


図 2-7 県外進学希望一子ども

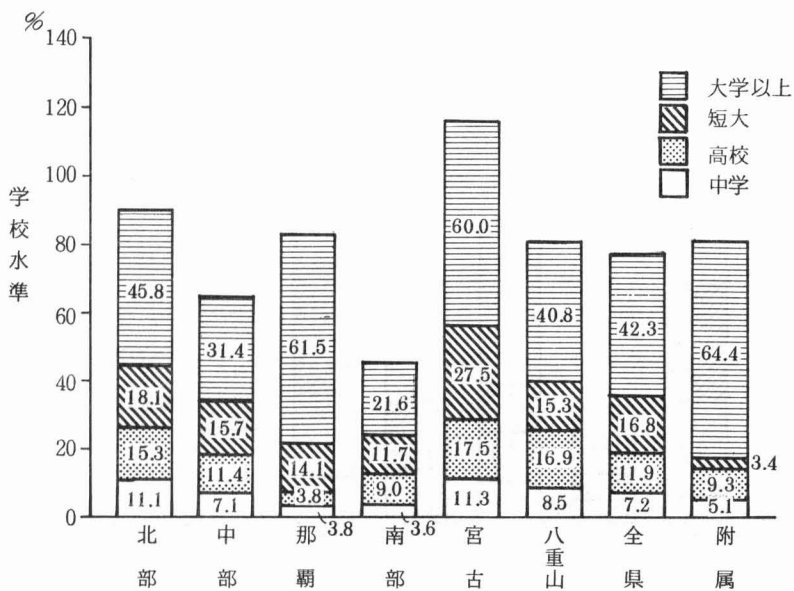


図 2-8 県外進学希望一親

進学期待と職業期待に関する研究（芳澤・島袋・中村・島袋）

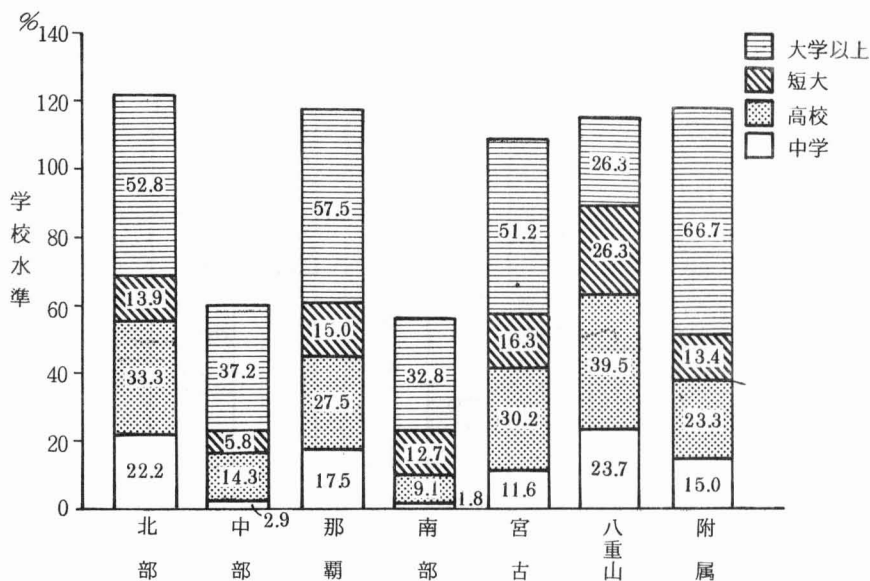


図 2-9 子どもの県外進学希望一男子

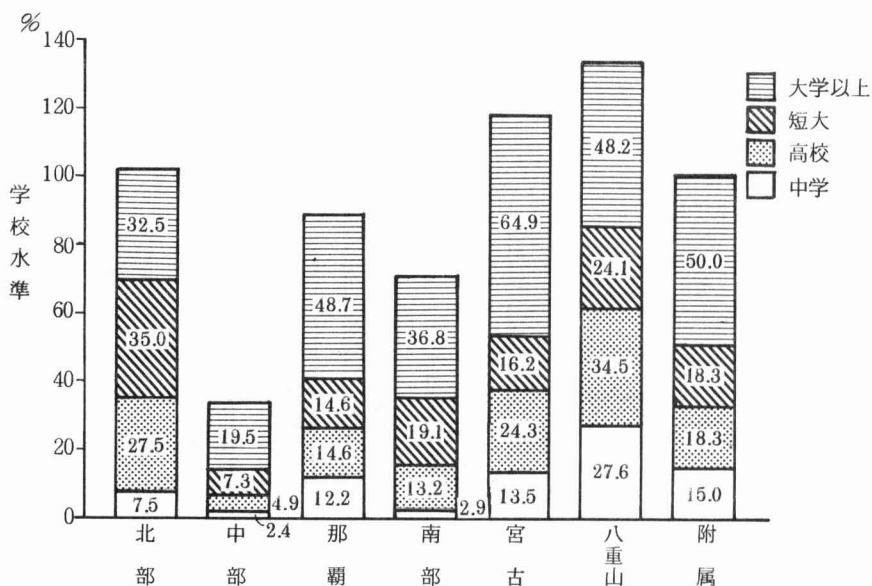


図 2-10 子どもの県外進学希望一女子

附属と那覇の子どもの県外志向の類似性は、図2-9、10に示されているように、子どもの性別による県外進学希望にも表われている。この両者における選択比は、いずれの学校水準においても近似しているが、異なる点を指摘すると、附属の場合は、女子の方の選択比が各学校水準において、那覇よりも僅かに高いということであろう。

ところが、子どもの性別による附属と那覇の親の県外志向性となると、様相を異にする。図2-11、12が示すように、那覇の親は、県外の中学と高校に対して、男子にそれぞれ8.8%、11.8%が進学を希望しているのに対して、女子の場合は皆無である。それに対して、附属の女子の場合には、3.4%と8.5%の親が、県外を希望している。

一般的に、附属を含む各地域の親の県外志向性は、低レベルの学校水準においては男子よりも女子に対して低くなっている。しかし、この点で那覇のみが皆無であるということは、那覇が附属と異なるというよりもむしろ、たまたま本調査の対象となった那覇の親が示している特異性である、と言った方がよいかも知れない。

5. 進学理由

これまでは、上級学校と県外への進学期待を、親と子の双方で分析してきた。最後に、上級学校（県外を含めて）に進学する際の理由について概観してみよう。

子どもに対しては、「あなたが上の学校へ行くのは、どのような理由からですか」という設問の下に、①親が行けというから、②みんなが行くから、③仕事をするより学校へ行った方がいいから、④社会に出て高い地位につきたいから、⑤金もうけがしたいから、⑥社会に役立ちたいから、⑦いつとめ先に入りたいから、⑧いい結婚をしたいから、⑨自分の才能や能力を伸ばしたいから、⑩いろいろなことを知ったりできるようになりたいから、⑪父や母より偉くなりたい、⑫分らない、という計12の選択肢を設け、任意にいくつでも選んで貰った。

一見すると、かなり雑駁な選択肢群に思えるが、範疇化を試みると、

進学期待と職業期待に関する研究 (芳澤・島袋・中村・島袋)

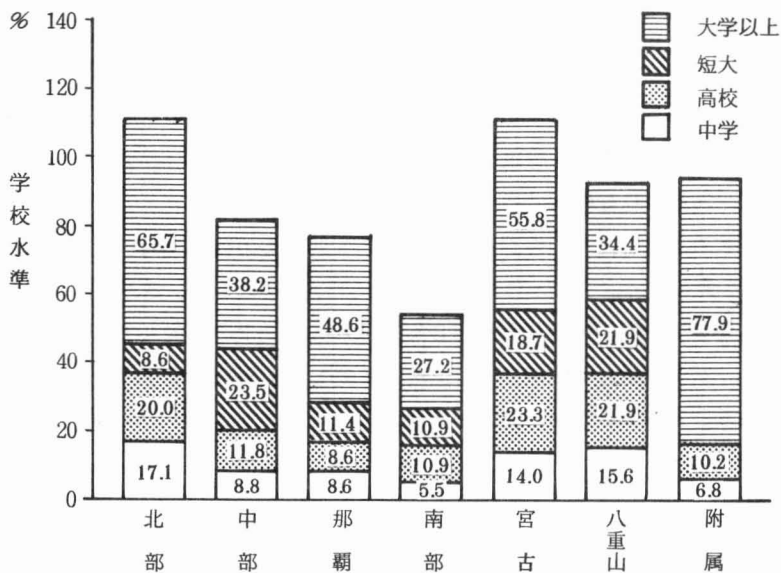


図 2-11 親の県外進学希望—男子

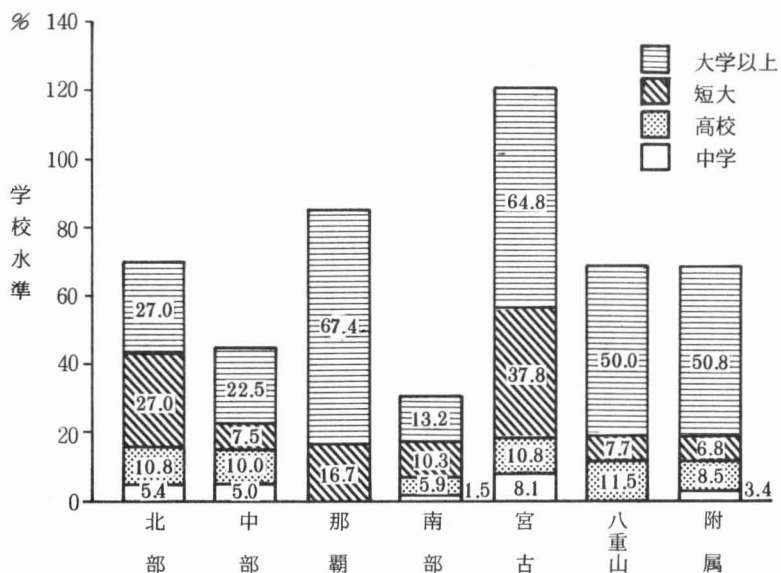


図 2-12 親の県外進学希望—女子

大体4つに分類できる。第一は、地位の安定や社会的な上昇志向を示す項目群である。すなわち、④の高い地位、⑤の金もうけ、⑦のよい勤め先、⑧のいい結婚、⑩の親よりも偉く、の5つの項目群がそれで、これが最も多い。第二は、①の親のすすめ、②の皆が行く、③の仕事につくよりも、といった項目群で、これは、どちらかという社会的強制や消極的な理由のカテゴリーである。第三は、⑨の才能や能力の伸張、⑩の知識や能力の獲得、といった自我の拡大を示唆する項目群、そして最後に、⑥の社会への貢献、と4つのカテゴリーである。

これまでは、親と子どもの進学期待に関して分析した結果、附属と那覇の類似性が多くの点で指摘された。しかし、進学理由となると、この両者に対応するものがあるに違いないという予測は困難となる。したがって、ここでは、附属に特徴的なことのみを、ひろい挙げることにする。

図2-12、13は、子どもの進学理由を選択項目毎に地域別に示したものであるが、県内各地域と比較して異なる選択比を示す附属の項目を、左から順次拾い挙げてみると、「才能や能力」、「社会への貢献」、「よい勤め先」、「高い地位」、「親よりも偉く」、「皆が行く」、「わからない」、の7つの項目が目につく。すなわち、附属の子どもたちには、「才能や能力の伸張」という「自我拡大型」（「知識の獲得」も宮古に次いで第2位である）、「社会貢献型」（これは特に目立って多い）、そして「よい勤め先」、「高い地位」、「親よりも偉く」、といった「社会上昇型」（「金もうけ」「いい結婚」の双方とも第2位を示している）が、他地域に比べると多いことが分る。

他方、「皆が行く」からという社会的強制を示す項目の選択値や、「分らない」の値が極端に低いということは、裏を返せば、上級学校へ進学する際の意識や自覚が明確である子どもが、附属に多いということを示しているとも言えるだろう。

親に対して進学理由を問うた際の選択肢も、基本的には子どもの場合と同じである。ただ子どもの場合には、より分り易くするという意味で選択肢を多くしたので、親の場合にはそれを若干整理したということと、親向け

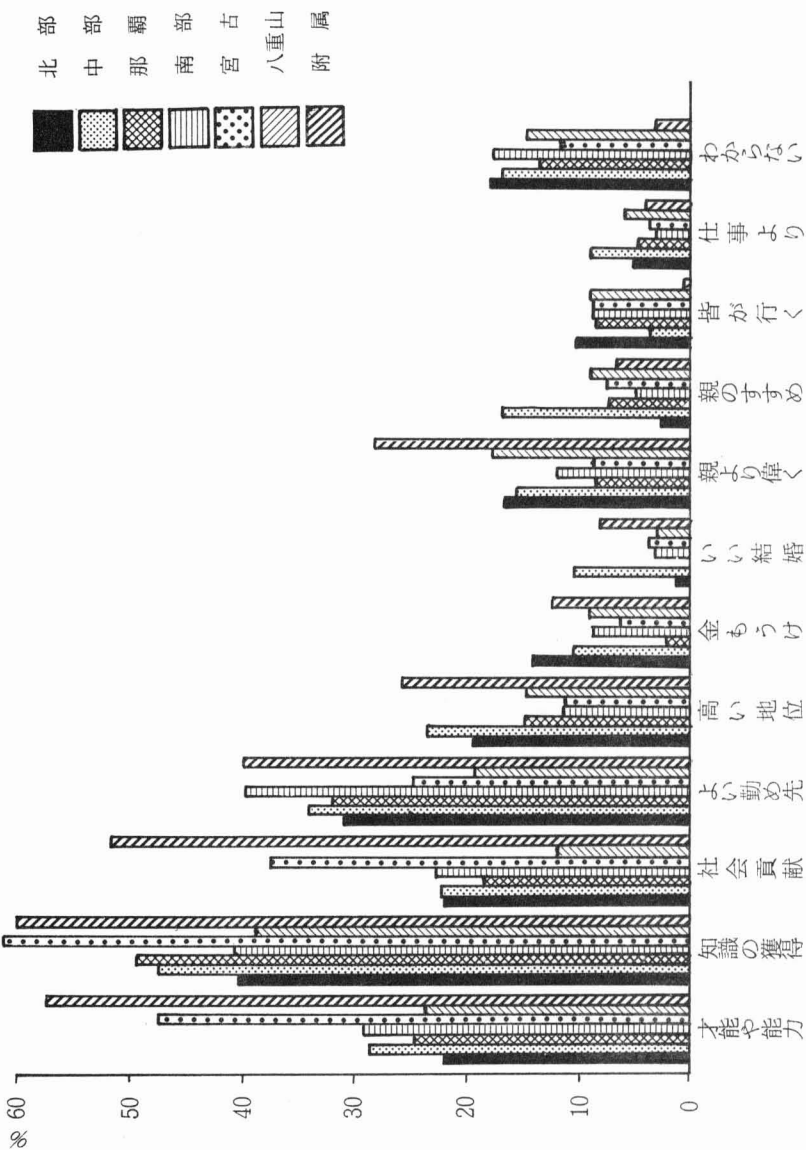


図 2-13 進学理由由一子ども

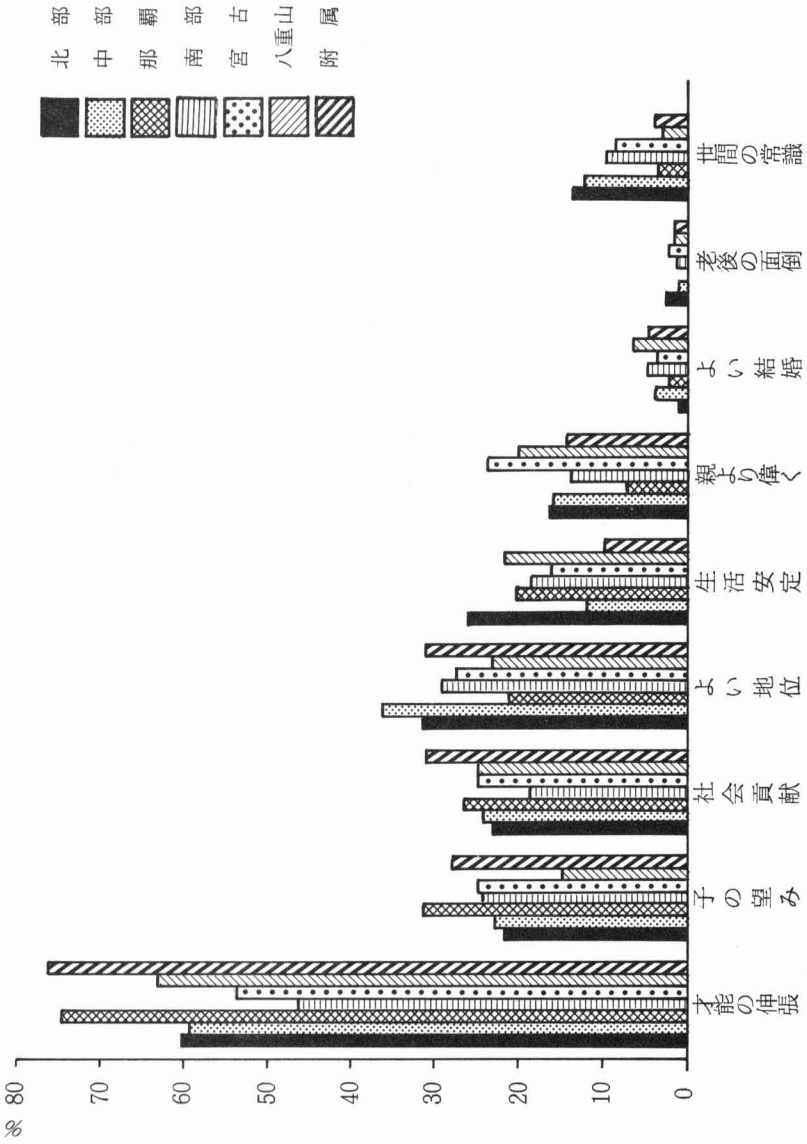


図 2-14 進学理由—親

の項目（「子どもが望むので進学させる」と「老後の面倒をみて貰いたい」）を付加した、という2点が異なる。

しかし、図2-14を見て分かるように、附属の親の示す特徴は、子どもに比べるとそれほど明らかでない。しかし、全く見出せないという訳でもない。いくつか拾い挙げると、「才能の伸張」や、「子どもの望み」という子どもの「自我を拡大させたい」という親（これは、那覇の親と同じ）や、「社会に貢献させたい」という親（これは、子どもの場合と同じ）が、他地域に比べて、附属には多いということが指摘できる。

以上、本節においては、親と子の抱いている、1) 上級学校と 2) 県外への進学期待、3) 進学理由の3点について、附属に特徴的な点を分析してきた。その結果、①附属は、上級学校（とくに大学や大学院）への進学期待が親子ともに高いということ、②県外進学に関しては、一般的には、離島や北部、それに那覇の方に希望する者が多いが、附属の場合にも、とくに「大学以上」に関してはかなり多く、この傾向は那覇と近似しているということ、③進学理由に関しては、子どもの「自我拡大」、「社会への貢献」、「社会的上昇」を志向する者が附属に多く、とくに子どもの場合には、上級学校への進学に際しての意図や自覚の明確な者が多いということが明らかにされた。

第3節 公立小学校と附属小学校の生徒と親の職業期待について

ここでは、公立小学校と附属小学校の生徒が、将来どのような職業（仕事）に就職を希望するのか、このような職業をどのような理由で選択するのか、また、仕事をしたい場所（地域）は何処か等について、学校種別、性別に比較検討する。同様に、親の立場から、特に母親は子供にどのような職業を期待するのか、母親が、子供の職業をどのような理由で選択するのか等についても比較検討する。

1. 生徒の職業選択

北部から八重山までの6地域のそれぞれの公立小学校（以下公立校と言う）と附属小学校（以下附属校と言う）の生徒が、21の職種の中から、つきたい職業（仕事）を選択したものを、選択率の高い順に5位まで列挙しまとめたのが表3-1である。表3-1の結果から、各地域の公立校において、共通して上位に選択されている職業は「歌手、スポーツ選手、タレント、役者」、「幼稚園、小中学校の先生」等である。次に、「設計士、パイロット、技術者」は北部と南部以外の4地域において選択されており、「会社員、公務員」は中部と那覇以外の4地域において選択されている。また、「弁護士、裁判官、医者」は那覇と宮古の2地域において選択されている。他方、附属校においては、上述のような公立校と概ね類似した職業も選択されているが、また「大学の先生、研究者、科学者」は附属校においてのみ選択されている。一部の公立校で選択されている「会社員、公務員」、「画家、漫画家、作家、デザイナー」、「店員、販売員」、「看護婦、看護師」、「大工、職人、運転手」、「警察官、消防士」等の職業は、附属校においては選択されていない。附属校は、どちらかと言えば那覇や宮古地域と職業選択の内容が若干類似している。そこで、6地域全体の平均値から、選択率の高い上位5種の職業と、附属校で選択された上位5種の職業について、学校種別に選択率を示したのが図3-1である。図3-1において、公立校の場合、「大学の先生、研究者、科学者」以外の5職業が選択率5位までのものであり、また、附属校の場合、「会社員、公務員」以外の職業が選択率5位までのものである（因に、公立校の場合、「大学の先生、研究者、科学者」は13位で選択され、一方、附属校の「会社員、公務員」は8位で選択されている）。図3-1の結果から、「会社員、公務員」以外のすべての職業において、公立校に比べ附属校の選択率が高くなっている。特に、「弁護士、裁判官、医師」の職業に関して、公立校の生徒は5位で選択しているのに対して、附属校の場合は3位で選択している。さらに、この職業において、学校種間の差が大きい。また、図3-1において、公立校の6職業の選択率の合計が57.2%であるのに対して、

表 3-1 地域別に見た公立小学校と附属小学校の生徒の職業選択

（％）

北 部 地 域	1. 歌手、スポーツ選手、タレント、役者 2. 幼稚園の先生、小中学校の先生 3. 画家、漫画家、作家、デザイナー 4. 店員、販売員 5. 会社員、公務員	(17.1) (17.1) (9.2) (9.2) (7.9)
中 部 地 域	1. 幼稚園、小中学校の先生 2. 歌手、スポーツ選手、タレント、役者 3. 設計士、パイロット、技術者 4. 看護婦、看護師 5. 画家、漫画家、作家、デザイナー	(17.1) (11.8) (11.8) (7.9) (5.3)
那 覇 地 域	1. 歌手、スポーツ選手、タレント、役者 2. 幼稚園、小中学校の先生 3. 弁護士、裁判官、医者 4. 設計士、パイロット、技術者 5. 画家、漫画家、作家、デザイナー	(19.8) (19.8) (12.3) (12.3) (6.2)
南 部 地 域	1. 歌手、スポーツ選手、タレント、役者 2. 幼稚園、小中学校の先生 3. 大工、職人、運転手 4. 会社員、公務員 5. 店員、販売員	(22.8) (19.5) (7.3) (5.7) (4.9)
宮 古 地 域	1. 歌手、スポーツ選手、タレント、役者 2. 弁護士、裁判官、医者 3. 幼稚園、小中学校の先生 4. 設計士、パイロット、技術者 5. 会社員、公務員	(18.8) (11.1) (8.8) (8.8) (7.5)
八 重 山 地 域	1. 歌手、スポーツ選手、タレント、役者 2. 会社員、公務員 3. 幼稚園、小中学校の先生 4. 警察官、消防士 5. 設計士、パイロット、技術者	(21.5) (13.8) (10.8) (7.7) (6.2)
附 属 小 学 校	1. 幼稚園、小中学校の先生 2. 歌手、スポーツ選手、タレント、役者 3. 弁護士、裁判官、医者 4. 設計士、パイロット、技術者 5. 大学の先生、研究者、科学者	(21.7) (20.8) (14.2) (10.0) (4.2)

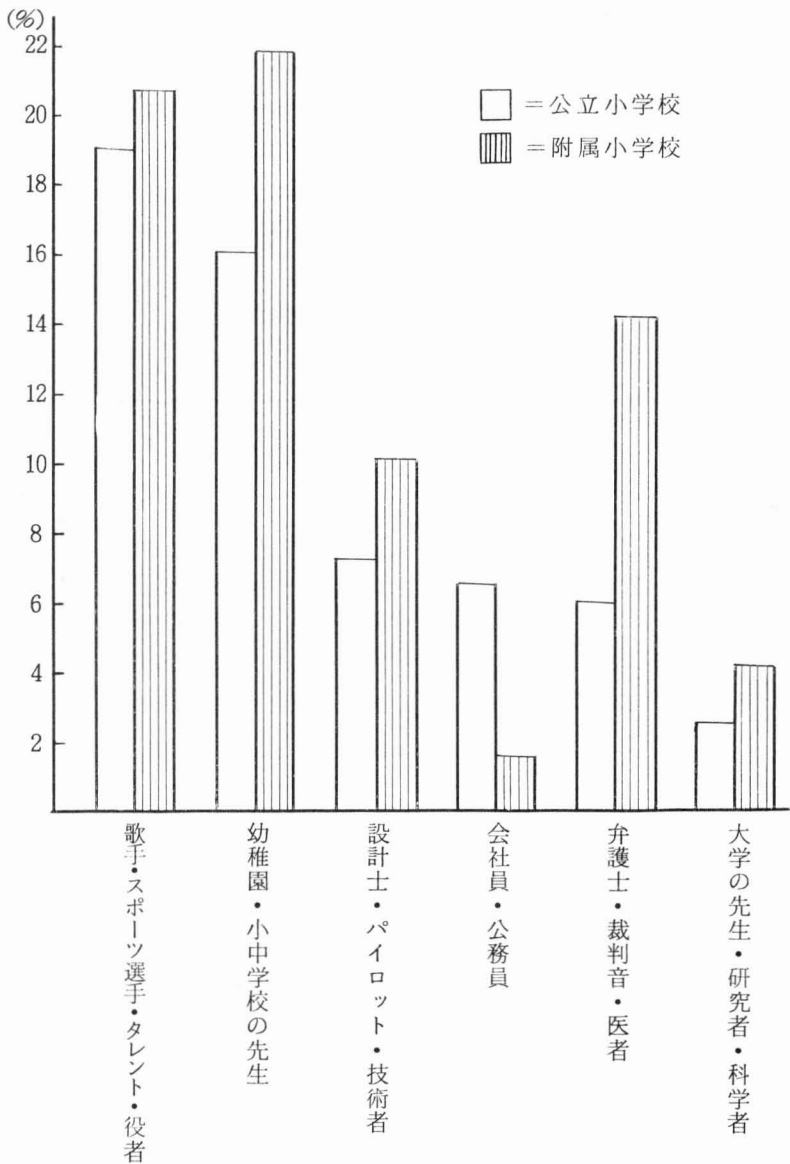


図 3-1 職業選択の学校種別比較

進学期待と職業期待に関する研究（芳澤・島袋・中村・島袋）

附属校のそれは72.6%である。このような選択率の差の出現にはいろいろ原因が考えられるが、この選択率の差は、附属校に比べ公立校は選択する職業が多様でバラツキが多く、反面、公立校に比べ附属校は選択する職業の種類がかなり限定されていることを示唆するものである。

次に、学校種別に職業選択の結果を男女別にまとめたのが表3-2である。

表 3-2 職業選択の男女別比較

		(%)	
公立 小学校	男子	1. 歌手、スポーツ選手、タレント、役者 2. 設計士、パイロット、技術者 3. 会社員、公務員 4. 弁護士、裁判官、医者 5. 大工、職人、運転手	(25.7) (14.7) (8.2) (7.8) (6.1)
	女子	1. 幼稚園、小中学校の先生 2. 歌手、スポーツ選手、タレント、役者 3. 店員、販売員 4. 看護婦、看護師 5. スチュワーデス	(30.6) (12.5) (9.8) (7.5) (5.5)
附属 小学校	男子	1. 歌手、スポーツ選手、タレント、役者 2. 設計士、パイロット、技術者 3. 弁護士、裁判官、医師 4. 大学の先生、研究者、科学者 5. 幼稚園、小中学校の先生	(36.7) (20.0) (13.3) (6.7) (3.9)
	女子	1. 幼稚園、小中学校の先生 2. 弁護士、裁判官、医者 3. スチュワーデス 4. 看護婦、看護師 5. 歌手、スポーツ選手、タレント、役者	(40.0) (15.0) (6.7) (6.7) (5.0)

まず、公立校と附属校の男子について見ると、両校とも2位までは同職業が選択されている。しかし、両職業とも公立校に比べ附属校の選択率が高い。公立校の男子は3位と5位に「会社員、公務員」、「大工、職人、運転手」を選び、附属校に比べブルーカラー的職業を選択している。一方、附属校の男子は、4位と5位に「大学の先生、研究者、科学者」、「幼稚園、小中学校の先生」を挙げ、公立校に比べホワイトカラー的職業を選択している。次に、学校種間の女子の結果についてみると、「幼稚園、小中学校の先生」、「歌手、スポーツ選手、タレント、役者」、「スチュワーデス」、「看護婦、看護師」の4職業は両方の学校で共通して選択されている。「幼稚園、小中学校の先生」は両方の学校で第1位に選択され、女子生徒のもっとも期待する職業であると考えられる。「歌手、スポーツ選手、タレント、役者」は公立校において、2位で選択されているのに対して、附属校では5位に選択され、選択率もかなり低い。公立校女子が独自で選択した職業は「店員、販売員」であるのに対して、附属校の女子のそれは「弁護士、裁判官、医者」であり選択率も高い。このような点から、附属校女子は公立校女子に比べ、より知的職業を選択していると解される。

さらに表3-2の結果から、「歌手、スポーツ選手、タレント、役者」は、小学校男女生徒からもっとも期待され選択されている職業である。しかしながら、このような結果は、テレビ、ラジオ、新聞、諸印刷物等の情報媒体を通して見聞した人気の職業への憧れが反映した一時的現象と解釈される。なお、このような人気の職業を選択する傾向は、学年進行、年齢的発達によって減少することが報告されている(東江等、1985)。一般に「設計士、パイロット、技術者」、「弁護士、裁判官、医者」、「大工、職人、運転手」、「大学の先生、研究者、科学者」等は、男子生徒が期待している職業であり、「幼稚園、小中学校の先生」、「スチュワーデス」、「看護婦」等は女子生徒が期待する職業であると言えよう。

2. 母親が希望する子供の職業

表3-3は、学校種別に母親が子供に希望する職業を選択率の高い順に

それぞれ5位まで列挙したものである。概ね、両校の母親ともに同種の職業を選択している。「幼稚園、小中学校の先生」、「設計士、パイロット、技術者」の職業について、両校間の選択順位や選択率の点で大幅な差は見られない。「会社員、公務員」の職業は公立校で第1位に選択され選択率も高く、附属校の選択順位や選択率との間に大差が見られる。反面「弁護士、裁判官、医者」の選択率では附属校の方が高い。また、公立校の母親は「看護婦、看護師」を選択しているのに対して、附属校ではその選択が見られず、代わりに「大学の先生、研究者、科学者」が選択されている。

表 3 - 3 母親が期待する子供の職業

(%)

公立小学校の 母 親	1. 会社員、公務員	(25.1)
	2. 幼稚園、小中学校の先生	(23.0)
	3. 設計士、パイロット、技術者	(12.0)
	4. 弁護士、裁判官、医者	(6.0)
	5. 看護婦、看護師	(3.9)
附属小学校の 母 親	1. 幼稚園、小中学校の先生	(29.7)
	2. 弁護士、裁判官、医者	(15.3)
	3. 設計士、パイロット、技術者	(15.3)
	4. 大学の先生、研究者、科学者	(9.3)
	5. 会社員、公務員	(6.8)

学校種別に、母親が期待する男子と女子の職業を選択率の高い順に示したのが表3-4である。公立校と附属校の母親が期待する男子の職業についてみると、まず、「会社員、公務員」が公立校で第1位に選択されているのに対して、附属校では第5位で選択され、選択率もかなり低い。他方、「弁護士、裁判官、医者」では公立校に比べ、附属校において選択率がかなり高くなっている。その外、公立校では「大工、職人、運転手」の職業が男子に期待されているのに対して、附属校では「大学の先生、研究者、科学者」が期待されている。さらに表3-4から、両校間の女子の職業について見ると、ほとんど類似した職業が両校で選択されている。しかしな

がら、附属校の母親は「幼稚園、小中学校の先生」の職業を期待する率が顕著に高い。その外に比較される点として、公立校の母親は女子の職業として、「看護婦、看護師」を選択しているのに対して、附属の母親は「大学の先生、研究者、科学者」を選択している。

表 3-4 母親が期待する男子と女子の職業

(%)

公立 小学校 の 母親	男子の職業	1. 会社員、公務員 (27.8) 2. 設計士、パイロット、技術者 (22.2) 3. 幼稚園、小中学校の先生 (12.9) 4. 大工、職人、運転手 (6.2) 5. 弁護士、裁判官、医者 (4.6)
	女子の職業	1. 幼稚園、小中学校の先生 (31.2) 2. 会社員、公務員 (26.3) 3. 看護婦、看護師 (8.8) 4. 弁護士、裁判官、医者 (4.6) 5. スチュワーデス (3.2)
附属 小学校 の 母親	男子の職業	1. 設計士、パイロット、技術者 (30.5) 2. 弁護士、裁判官、医者 (23.7) 3. 大学の先生、研究者、科学者 (11.9) 4. 幼稚園、小中学校の先生 (10.2) 5. 会社員、公務員 (5.1)
	女子の職業	1. 幼稚園、小学校の先生 (49.2) 2. 会社員、公務員 (8.5) 3. 弁護士、裁判官、医者 (6.8) 4. 大学の先生、研究者、科学者 (6.8) 5. スチュワーデス (5.1)

なお、興味あることは、表 3-2 の両校男女で選択されている「歌手、スポーツ選手、タレント、役者」の職業が、母親の立場からは全く選択されていない事である。このような点からして、母親は子供の職業を子供自身の選択より、現実的で安定的な観点から選択していると推測される。

3. 生徒と親による職業選択の理由

生徒は上述の職業をどのような理由で選択したのだろうか。職業選択の理由に関し、選択肢と学校種別、男女別の選択率を示したものが表3-5である。表3-5から、両校とも「好きで興味がある」の選択肢への選択率がもっとも高い。しかし、男女とも附属校の方が高い率を示し、その中でも特に女子の選択率は高くなっている。「自分の能力をいかせる」の選択肢では、両校間の全体値ではほとんど差はないが、しかし、男子では附属校が高く逆に女子では公立校が高くなっている。また、附属校の生徒は公立校に比べ「社会のために役立つ」理由で職業選択する傾向が見られる。反面、公立校は「りっぱな家庭をつくるため」、「給料、待遇がいい」、「金持ちになれる」の選択率が若干高い。

3-5 生徒の職業選択の理由

(%)

職業選択の理由	公立小学校			附属小学校		
	全体	男子	女子	全体	男子	女子
1. 好きで興味がある	46.5	40.0	52.9	56.1	46.6	65.5
2. 自分の能力を生かせる	12.8	11.4	14.1	12.1	17.2	6.9
3. 給料、待遇がいい	3.1	4.5	1.6	1.7	3.4	0.0
4. 地位が安定している	1.2	0.8	1.6	0.9	1.7	0.0
5. 多くの人に尊敬されている	2.1	2.9	1.2	0.0	0.0	0.0
6. 社会のために役立つ	11.1	13.9	8.2	17.3	19.0	15.5
7. りっぱな家庭をつくるため	9.8	11.4	8.2	6.9	6.9	6.9
8. 親やまわりの人がすすめる	2.1	2.9	1.2	4.3	3.4	5.2
9. 金持ちになれる	3.1	3.7	2.4	0.9	1.7	0.0

また、表3-6は母親による子供の職業選択の理由について、選択率をまとめたものである。公立校の母親は、附属校の母親に比べ、「地位の安定」、「社会的評価」（特に女子の場合）等の理由で子供の職業を選択する傾向が見られる。これに対して、附属校の場合、「子供の適性と興味」、「子供の才能や能力」、「社会のために役立つ」等の理由から子供の職業を選択する傾向がある。なお、附属校の母親は、どちらかと言えば男子の職業選択に関して主に社会的関連要因を理由に挙げ、女子のそれに関しては主に個体的要因を挙げる様子が見える。

表3-6 母親による子供の職業選択の理由 (％)

職業選択の理由	公立小学校			附属小学校		
	全体	男子	女子	全体	男子	女子
1. 子供の適性と興味に合っている	15.5	13.4	17.6	25.3	26.1	24.5
2. 子供の才能や能力が生かせる	7.9	10.3	5.4	15.0	13.0	17.0
3. 給料や待遇がいい	5.1	6.2	3.9	4.1	4.3	3.8
4. 地位が安定している	13.3	13.9	12.7	5.9	4.3	7.5
5. 社会的に評価されている職業である	8.7	7.2	10.2	6.4	10.9	1.9
6. 社会のために役立つ	9.9	12.4	7.3	19.5	23.9	15.1
7. 立派な家庭が築ける	5.2	3.6	6.8	4.1	4.3	3.8
8. 本人が望んでいる	17.6	17.5	17.6	19.8	13.0	26.4
9. 周囲の人がすすめるから	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0

4. 将来希望する仕事場所

表3-7は、生徒が将来仕事をしたい場所に関して、選択肢と選択率を学校種別、性別に集計したものである。公立校の生徒は附属校に比べ、「生まれ育った所やその周辺」、「沖縄県内」に将来仕事をする場所を求める傾向が強く、これに対して、附属校の生徒は公立校に比べ、「沖縄県外」や「外国」を希望する傾向が強い。特に、附属校男子の「沖縄県外」や「外国」志向は目立っている。

表3-7 子供が将来仕事をしたい場所

(%)

仕事をしたい場所	公立小学校			附属小学校		
	全体	男子	女子	全体	男子	女子
生まれ育った所やその周辺	16.6	15.9	17.3	5.8	3.3	8.3
沖縄県内	44.3	40.4	48.2	35.0	26.7	43.3
沖縄県外	32.3	35.1	29.4	39.2	46.7	31.7
外国	5.2	6.1	4.3	20.0	23.3	16.7

以上、本節においては公立小学校と附属小学校の生徒の職業選択、職業選択の理由、仕事したい場所等の結果について、学校種間、男女間で比較検討した。また、親による子供の職業選択や職業選択理由についての結果を、同様に比較分析した。主な結果は、1) 公立校の生徒は、附属校の生徒に比べブルーカラー的職業を選択し、他方、附属校の生徒は公立校の生徒に比べよりホワイトカラー的職業を選択している、2) 母親が期待する子供の職業選択に関する特徴的な点は、附属校の親は公立校に比べ子供に高度な知的能力を必要とする職業を期待していることである、3) 附属校の生徒は、公立校に比べ「社会のために役立つ」の理由で職業選択する

傾向が若干高い、4) 将来希望する仕事場所として、公立校生徒がどちらかといえば県内志向を示しているのに対して、附属校の生徒は県外や外国志向を示している、等である。

このような附属校生徒の職業に関する特徴は、他の要因も関連していると思われるが、生徒の保護者には公立校生徒の保護者に比べ、高学歴者、専門的有職者、高所得者等が多いという結果と密接な関係があると考えられる。

参 考 文 献

東江平之、安谷屋良子、芳澤毅、中村完、富永大介、島袋恒男、1985
復帰後沖縄における教育的適応行動に関する研究、昭和59年度特定研究、
琉球大学法文学部